5861
2144
no.15

大正十一年九月廿八日印刷納本
大正十一年十月一日發行（毎月一回一日發行）

LA SEMANTO

種蒔く人

行動と批判

第二年第三巻第十三號

革命詩人マルチネの近作戯曲

同人創作號

アインスタインよりバルビユツスへ

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

◇十月號◇

種蒔き社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたものゝ運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對する。この狀態の續く限り、人間は人間の敵である。その間に妥協の道はない。然りか否かである。眞理か否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のいはない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に結合と分離とが生ずる。

○○○○○○○○○○○○○○○
○○○。○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○。○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○。○○○○○○
○○○○○○○○——世界の同志と共に！

種蒔き社

種蒔く人十月號目次

一週年（題言）……
夜（戲曲）……マルセル・マルチネ
眼（小說）……山川亮
遺產（小說）……津田光造
屍に咲く（戲曲）……上野虎雄
美學者の戀（詩）……村松正俊
血痕（小說）……松本淳三
おい！仲間（小說）……今野賢三
暴風雨（小說）……松本弘二
□世界欄——地方欄——聾人……
□秋田靑年思想硏究會の創立……
□社會主義講座……
□アインスタインよりバルビユスへ……
表紙、カット、漫畫……柳瀨正夢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一週年

一週年の總勘定は決して眼醒しかつたといへない。僕らはそれを自覺し、そのことを恥ぢる。

存在が僕らの何よりの生命であつた。來る可き第二週年は行動と戰術の時代であらねばならぬことを覺悟する。

僕らを亡すものは官憲でも、また、それが手先であるブルジョア思想家でもないことを斷言する。

僕らを乘越すものは僕らより年少者、〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇。

あらゆる聲援者、わが同志である讀者諸君に感謝す。われらが欲するならば、プロレタリアの發言である一個の雜誌さへも生存し得る。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇！

一九二二年十月　　編輯者一同

東167815

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夜

マルセル・マルチネ

これは八月號の本誌世界欄で簡單に紹介しておいたマルチネの近作五幕物『夜』の書き出しである。原作は無韻の詩であるが、茲では假りに散文譯にしておいた。近く全譯を公けにする場合、稿を改めて譯し直すことにする(S生)

農家の一室。

觀客席から向つて左に、煤けた石造りのマントルピースがあり、その中に葡萄蔓と松毬（まつかさ）が燃えてゐる。マントルピースの前に小さなストーヴ。

左手の隅に流し場。

正面奥に、木製の寢臺が二箇列んでゐる。

舞臺中央に、樅の木の大テーブルと二脚の腰掛け。テーブルの上に、灯のはいつたカンテラが置かれ、その明りが、ストーヴの火と共に、貧しく部屋の中を照す。

右手の隅に、物置きへ續く階段。

窓はない。右手の扉から外に通ずる。扉に附いてゐるガラスの一つは毀れてゐて、其處から、時々風のために、雪片が部屋の中まで吹き込んで來る。

幕擧がると、ストーヴの前の藁椅子へマリエットが腰掛けて、眼鏡を鼻の上へずらし、靴下を繕らつてゐる。嫁が流し場で皿を洗つてゐる。

子供は階段の一番下の段に腰掛けて、冷い膩肉の這入つたサンドヰツチを喰べてゐる。

マリエット（かなり肥つた女。年はとつてゐるが、四肢の筋肉は頑丈で、未だ若々しいところがある）今晩、何か牛どもに喰はせられるげえ？

アンヌ・マリー（小柄な痩せぎすな女で、苦勞に憔れた顏をしてゐる。淋しい微笑を浮べて）もう飼糧さねえだよ。牛こども葉つぱさべえ喰つでるども、葉つぱぢや身體續がねえだ。先に雄こに死なれたあの牝牛あもう葉つぱ持つてつて吳えても顏を向ふさむけて、振り向かねえだ。そんでは、仔牛泣いてども、知らねえ面しでるだよ。それに、仔牛どものためにはアのけといて吳えた絞り粕も、もう無えだはで、元氣のねえ牝牛どもの乳さ飲むより外に、仕方ねえだどもな。

（間。老婆は答えないで靴下の繕ひを續ける。）

ルイゾン。あの牝豚だつて、俺はあ、もうどうしたらえゝだか知らねいだよ。プレ・オウ・プレートルの上の方ぢや、垣の後ろのとこさ、まだちつとべえ草殘つでる場所あるだども、このはア嵐ぢやどうにもならねいずら！無理に外さ追出して見たところで、あの豚こはア何ぼか草喰はれべい？それから仔豚の方法は四匹とも、もう長えことねえずら。親豚だつて同じこんだよ。今朝なん、乳首はあ血だらげになつでるでねえか。仔豚ども乳こ飲むべえど思つても、なんと、飲まれるもんでねえ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（間）

仔豚ども殺してやつだ方がえゝかも知れねえ。親の方だつておんなじこんだ。

マリエット　靜つ！……お前達何も聞えなかつたかさ？またおつ始まつたでねえかな？

アンヌ・マリー
ルイゾン　　　}でねえだよ。

アンヌ・マリー　風だすべ。なんぼかひどく吹くもんだか。屋根の染こおつ外れでるし、煙筒さはぁぶつこはれでるし、まるで雪崩みてえに雪こ吹きき付けるだ。おつかねえ天氣だべ。

マリエット（變な笑ひ方をして）おつかねえて？……風だの、雪だの、天氣だの、そしたことがはあおつかねえだか？

アンヌ・マリー（淋しい微笑）でもおつかねえだよ。前のことははあ忘れて了つて、俺たちあはあいつも同じことべえ繰り返えして云ふもんだはで。おや、もう來たでねすか。

（入口の扉を叩く音、『這入つてもええかね？』といふ聲）

（眞白な髯を生やした一人の老人が、全身雪に覆はれて這入つて來る。毛提燈を消して扉の傍へ置く。誰も、殊更この老人に挨拶しやうとはしない。老人は一方の腰掛けに座し、元氣のないずる〱した調子で語る。）

老人　マリエツ今晩は。みんな今晩は。

マリエット　今晩はトアンのお父う。何か變つたことあるげえ？

トアンのお父う　この嵐ではあ、なんと、道はめちやくちやになつでるでねは、俺二度もぶつ倒れたで、まるではあ、知らねい道さ歩いでるずう氣になつでは。だがえゝあんべえにの、お前とこのカンテラの明りさ、まるきり見えねえこどもなかつたでねは俺あ、まるで空の星ふ廻るやうなあんべえに、お前とこの火さ目當てにして、どやらこやら來ること出來たゞよ。

マリエット　何か變つたことねえかさ？

トアンのお父う　何も知らねいだな。一昨々日からのこの沈默があるだけでねえかさ。このおつかねえ沈默がな。

一人の女（ぼろにくるんだ赤ん坊を兩手に抱いて、トアンのお父が這入つて來た時と同じやうな調子で這入つて來る。以下・劇の進行中・子供老人等の農民が、同じ樣子で、同じ身振りで、順次ぽつり〳〵這入つて來る。）んだ。おつかねえ沈默だ。大砲の恐ろしい音や、彈丸や、それから色々な人殺し道具の音がやむと、この沈默が來るだな。あの恐ろしい音よりも、この沈默の方が、おらよけいにおつかねえやうな氣がしてなんねえ。

一人の男　俺達あもう何も知らねいだ。何處も彼處も、この沈默があるばかりだで。一昨々日からはあ、何も彼もみんな死んで了つたやうなもんでねか。俺達の間でせえ、もうはあ恐ろしさに馬鹿みてえになつて、みんな默りこくつてるでねは。みんな手前の口さ何も入れてやらうとしねえでねさ、『もう兵隊はゐねえだかさ？もうみんな殺されて了つたゞかさ？』つてことばかり云つてるだもんな。

數人一緒に　んだ〳〵。俺達もはあ、一昨々日から、兵隊さ一人も見ねえでは。

若い娘　近頃殺された兵隊さんの、死骸があるばかりでねか。血みどろになつた黃色い死骸が雪の上にごろ〳〵轉がつてゝねはその上へ、なんぼか烏ども降りて來るもんだか！そんでねは、烏ども、櫻實さ啄つくやうに、死骸の眼さ啄つく〳〵だ！

數人一緒に　それ狼どもゝはあ、出てうせてうろ〳〵しでるでねか。そんではあ、若い兵隊さん達の死骸さ、勝手放題に喰ひ散らしでるだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眼

山川　亮

（一）

丁度今から七年程も前の一九一一——年のある晩秋の日の午前十時ごろ、西班牙南部の小さな町で金屬工雇主組合の領首が、西班牙のサンヂカリストの手で、慘殺された事件が町の住民達の心を震駭させた。

それは町の目貫の大通りの出來事で、雇主組合の領首と云ふのは、その日町の公會堂で正午過から開催される組合の會議に出席の途中であつた。彼は自動車のなかに偉大な體軀を思ふさま反りかへらせて、香りの高い葉卷を燻らせながら今朝の新聞を讀んでゐた。彼は頭のなかではこの半月前に自分の所有工場で擡つた同盟罷業を、巧妙なペテンにかけて取鎮めた上に、警察の力でその時の罷業工の重立つた者どもを牢獄にたたきこみ、尙ほ骨節の強い職工百名ばかりを突然馘首して終つたことを思ひ出して、薄氣味の惡るいやうな笑を唇の邊に漂はせた。そして眼ではやはり新聞の上の文字を拾讀みしてゐた。

その日の新聞には半月前の金屬工罷業の際の慘酷な鎭壓振りに反抗して、再び金屬工總同盟罷業が近くに決行されさうな氣運が到處の工場に漲つてゐる。少くもこの縣下全部に涉つて今から三週間以内に總同盟罷業を見るであらう。職工の復讐心は今や絕頂に達してゐる——と愿んなことが報ぜられてあつた。彼はこの記事を讀みさして、ふふんと鼻先で輕るく嘲笑つた。

『何を彼奴等に仕出かすことが出來るものか。馬鹿な彼奴等が、彼奴等は益々食ふに困るばかしぢやないか。』愿う呟いて

彼はその新聞を投げ棄てやうに腰る掛けの上に置いた。

西班牙でしか見られないやうな强烈な太陽の光線は、さんらんとして自動車の窓に照りつけてゐた。道の上にはまだ朝が早いので通行の人影も多くはなかつた。朝食前の物賣り(西班牙の朝食は午後一時頃)の姿が右往左往してゐた。これも西班牙特有の美しく着飾つた巡査が町の角々に立つたり、一定の距離の間を往來して時々は物賣りの若い娘に何か話しかけては、自分の退屈を紛らさうとしてゐた。朝の十時ごろに起きて働らいてゐるのは、貧乏人に限つてゐると云はんばかりに、夜深かし癖のある西班牙の町は、まだ睡眠から覺めきらない半ば微睡の狀態であつた。ただ深々と眞蒼に晴れ渡つた大空の太陽だけが、「早く起きろ！ 早く起きろ」と叫んでゐるやうに、燃え狂ふ光りを町全體に投げかけてゐた。

彼を乘せた自動車はこの空の下をこの町中を輕い地響を四邊に傳へながら滑るやうに走つて行つた。そして彼はやはり豪然と自動車のなかに反り返へつて、町を通る人々の姿を横目で睨みながら、片頰に薄笑ひを浮べてゐた。彼の禿げ上つた額はてらてらと小氣味よく光つてゐた。薄くなつた頭髮を奇麗に後頭部の方へ撫でつけて、美しく香油が塗つてあつた。顏を仰向けて自動車の後部の窓際に頭を凭せかけてゐる爲めに大きな蟇のやうな口がなほのこと下部に引下げられてゐた。髯のない頰から口許へかけての肉が、脂肪太りにだぶだぶと垂んでゐた。それは彼が或席上で新聞記者の質問に答へて、『長生をする秘訣は、二十五歲まで女に近寄らぬことと、毎朝鰻を食ふことですわい』と喋つて記者仲間の笑話の種とされたと云ふ噂さを眞實と思はせる程に下卑た容貌であつた。そして彼の趣味はと云へば美術館を自分の邸內に建ててにせ物を集めることと、歐洲戰が始まるや否や[illegible] 金儲けをする位のものであつた。そして生涯の目的はと云へば儲けた金の一部を投げ出して、位階勳等でも貰つてそれを墓碑銘に刻みたい位の無邪氣なものであつた。

彼は禿げ上つた廣い額を右手の掌で撫であげた。そして何事にも滿足らしい面持で、恍惚として自分の未來のことを空想してゐた。自分はまだ漸く五十を出たばかりだ。これからが自分の手腕の振へる年輩だ――と彼は考えた。そして現在の自分の位置、町の住民達に對する自分の權力、さうだ、自分は警察權すらも、何うかすると司法權すらも、自分の意志

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のまゝにすることが出來るのではないか。その證據は半月前の同盟罷業の時の事實で判然してゐる……
彼は得意になつて、うんと身體を反り返へらせて、兩脚に力を籠めて踏張つた。そして「何うだ、この俺の偉らさを見ろ！」と云はんばかりに、兩腕を胸の上に組合せて運轉手臺にゐる運轉手の後頭部を睨みつけた。
然しその瞬間であつた。突然、自動車の前方を人影が横ぎつたと思ふと運轉手が把手から兩手を離して、到底人間の聲とは思はれない奇怪な叫聲を出して街路へ轉がり落ちた。彼はこの不意の出來事に前後を失つて腰掛けから腰を浮かせ何事か判らないなりに自分も同じく逃げ出さうとして扉に手をかけた刹那に、黑いゴムまりのやうな物體が窓の眞下へ飛んで來た。それが地上に落ちたと思ふや否や、凄じい爆發の響と一緒に噴き出す黑烟のなかで、彼の自動車を粉々に打碎いて終つた。自動車ばかりでなく、彼の大切の肉體（これからうんと金儲けをする筈であつた肉體）も、彼の得意な未來の夢も、黑烟のなかで跡方もなく何處かへ吹き飛ばされて終つた。

（二）

この出來事のあつた前夜のことであつた。この町の町はづれ、街道からはずつと奥の方へ入つたある別莊風の建物の三階の一室には、夜更けにも拘らず燈火の光りが明々と窓外に洩れてゐた。
この室はマドリッドに本部を持つてゐる、靑年サンヂカリストの秘密結社の支部であつた。それは丁度、ある使命を帶びてマドリッドからの終列車で、今夜この町へ到着した二人のサンヂカリストを迎へたばかりのところであつた。
『何時まで議論を鬪はしてりやいいんだ。もう何も云ふことはないぢやないか。喋ることがあるのなら、喋るかはりに實行すりやいいんだ』
二十四五歳位の勞働服の靑年が烈しい語調で恁う云つた。そして一座の顔を順々に眺め渡してから、更らに恁う云ひ足した。
『吾々の仕事は喋つてるばかりが、仕事ぢやないんだよ。それに君達は喋り續けに喋つてばかりゐて、それで耻しいとは

思はないのかね。』

『勿論實行が最後さ。然しその最後に行く迄の道程としては、議論が必要なんだ。その場合の議論は、最早や單なる議論ぢやないんだよ。それは實行も同様なんだよ。』

卓の端に腰かけてゐるボヘミヤンネクタイの青年が恁う反駁した。

『それは僕にだつて判つてるさ。ただ問題は、今この議論が君の云ふ通り實行そのものであるか、何うかと云ふのだ。ここでサンヂカリズムの理論を何百遍繰り返へしたつて、それで總同盟罷業が成功すると思ふのかね。』

『思ふとか、思はないとか僕は云つてやしない。唯、理論から進んで行けば――』

『もう、いいぢやないか。二人とも判つてることなんだ。まだ重要なことが殘つてるんだ。』

椅子の背に凭れて、先刻から一座の議論の沸騰したのを默つて聞いてゐた一人が恁う語を挿んだ。

『兎に角、マドリッド側の意嚮は、總同盟罷業を決行する前に、[illegible]て、その混亂に乘じて一擧に資本家の牙城に迫らうと云ふ策略なんだ。さうでしたね……』と、自分の傍にゐる二人の青年を振返へつて、更らに彼は話を續けた『そこで誰と誰とが、その實行委員に當るかと云ふ問題なんだ。第一が失敗して斃れたら、直ぐ第二第三と云ふ風に、少くも五人位の委員が必要だ。』

『さうだ。それから道路の見張番、信號手にも人が要るよ』

恁う云つたのは、まだ中學の制服を着けた二十歳前の美少年であつた。

一人が椅子から立上つて閉めきつてあつた窓を押し上げた。晩秋の冷たい夜風が窓のカーテンを微かに搖がせて、生々とした大地の呼吸を吹き込んだ。多人數の呼吸のいきれと、飲物の香と、燈火の燃える匂とで充滿してゐた頽廢した空氣のなかへ、水のやうに新鮮な匂が流れ込み、次第にそれが頽廢した空氣を押し退けて、すがすがしい香しさが室の隅から隅へ押し擴がつた。人々は蘇生つたやうに、ほつと息を吐いて熱し切つた頭を冷した。

燈火の焰が夜風に吹かれて、伸びたり縮んだり微かに搖れてゐる。その焰を先刻から默つて凝つと瞶めてゐた一人の男

がこの時呻吟き出すやうに語を洩した。

『僕等はやらなくちやいかん。語は不必要だこの肉體全部が僕等の語だ。革命諸君、明朝はどうしてもそれを實行しやう。彼奴等の會議は正午から公會堂であるんだ。』

恁う云つて彼はつかつかと進んでマドリツドから來た二人の使者の手を、力一杯に堅く握り締めた。彼は破れた背廣服を着てゐた。頭髮も髯も茫々と生え伸びて二つの瞳だけが熱病患者の眼のやうに、怪しくぎらぎらと光つてゐた。彼はカラもネクタイも着けてはゐなかつた。握手の爲めに差出した彼の手の指の爪は、長く伸びて黃色く汚れてゐた。彼に手を握られながら、マドリツドから來た使者の一人は喜ばしさうに答へた。

『さうです、吾々はやらなくちやならんです。此處に吾々の魂があります。私はこの魂を貴方に唯今から差し上げます。』

そして使者は卓の上から一個の紙包を取り上げて彼に渡した。

『これは明朝の貴方等の門出を祝福する爲めに、マドリツドの同志が眞心籠めた贈物です。』

驟て實行委員の人選が始まつた。そして六名の青年サンヂカリストが、夫々の擔任を決められた。雇主組合領首の邸宅の見張人、街路での信號人二名、第一の[illegible]・第二の[illegible]、そして最後に全部の計畫が失敗に歸した場合には公會堂を爆破さす爲めの委員、都合この六名の青年が、マドリツドからの使者の前で任命された。

血の色をした味の荒い西班牙の葡萄酒か浪々と各自のコツプに滿された。一座の人達は盃を高く擧げた。

『成功を祝す』と一人が云つた。

『革命萬歲』と他の一人が低聲で叫んだ。

『青年サンヂカリスト萬歲』と一人がそれに相槌をうつた。

『萬歲、萬歲』

『革命主義者萬歲』

コツプの酒は一呼吸に呑み干された。そして空になつたコツプを各自床の上に投げ落して粉微塵にそれを打碎いた。

夜番の時刻を知らせる木の響が遠くから曉の四時を報じて來た。

（三）

晩秋とは云ひながら燃えるやうな日の光りは、街中に照りつけてゐた。朝の物賣りの姿が、それでも秋らしく澄んだ空氣のなかに、晝のやうに動いて行つた。其處へ突然、朝には珍らしい自動車の警笛が遠くから聞えて、軈て次第次第に此方へ近づいて來る自動車の重々しい車輪の音がはつきりして來た。

ある街角に佇んでゐた二人の青年は、この物音を聞くと急に立上つて靜かに四邊を眺め廻した。間もなくこれら二人の青年の眼の前を、一人の大學生がじろッと横目で見ながら通つて行つた。そして擦違ふ途端にポケットからハンカチを出す風をして小さな紙片を落して行つた。二人の青年はまた四邊を眺め廻した。巡査は遠くの方にゐて物賣の若い娘と何か夢中で話してゐた。一人の青年は素敏くその紙片を拾ひとつて讀んだ。それから直ぐ引裂いて嚙み棄てた。軈てまた一人の立派な紳士が通り過ぎた。そして二人を見ると顏を撫でるやうな風をして手を振つて相圖をした。そして無言のまま足早やに行過ぎて終つた。

この時、二人の青年とは反對の舖道の木蔭に、見窄らしい一人の乞食が何處からか歩いて來て座つた。例の西班牙特有の乞食であることは、誰の目にも一目で判然する立派な乞食紳士であつた。然しその乞食の姿を認めるや否や、此方の二人の青年は前後に並びながら片手をポケットに突込んで、車道の方へ突進して行つた。その瞬間に、街角を曲つた一臺の自動車が青年達の眼前に現れた。それを見るより早く、前に歩いてゐた青年は片手に口火のついた爆彈を振翳しながら『とまれ！　自動車、とまれ！』と叫んで自動車の前面から衝突からうとした。

爆裂彈を見た自動車の運轉手は、死物狂ひの聲をあげて遠くの巡査を呼んだ。

『運轉手、早く遁げろ。まごまごすると生命がないぞ。』斯う叫びながら、青年は更らに數歩自動車の方に馳せ寄つた。

[illegible]

[redacted]

西班牙の空を蔽ふ蒼空はこの暴虐を眺めてゐた。燃える焰のやうな西班牙の太陽がこの暴虐を眺めてゐた。そして——さうだ、ここに一人、彼方の舗道の木蔭に座つてゐる乞食が、先刻から默つて一伍四什を眺めてゐた。然しその乞食の顔——死者のマスクのやうな顔面筋肉の一微動も見せず、固く噛み締めた唇は顫へもせず、冷たく靜かに、まるで路傍の石塊のやうに無感覺に——然しその眼だけが——何といふ眼であらう、怪しくぎらぎらと熱を帶びて狂人のやうな眼、そしてその眼のなかに燃え狂ふてゐる狂的な復讐心、悲痛な殺人慾、まるで西班牙の空に燃える太陽のやうな眼である。その眼で彼はこの暴行の一切を貪り盡すやうに眺めてゐた。

この不思議な乞食——それは昨夜の青年サンヂカリストの集會の席上で、マドリッドの使者から爆裂彈を受取つた男であることは云ふまでもなからう（一九二一・五・一五）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

遺産

津田光造

惡戯な運命が造つた架空の橋、それは此の世に於て、苟も常識ある人が、未だ曾て渡ることの冒險を敢て爲し得なかつた橋である。空行く雁ならばいざ知らず、大地にしつかと足踏み鳴らして歩かねばならぬ人間には、その曲藝は覺束ない。輕業師のやる輕業を手に汗握つて見る程の人間が、輕業をやる事は無謀である。相場師のやる投機仕事に冷や汗をかく程の人間がそれをやる事は愚昧である。

元來が臆病で優柔不斷な村山に、それが出來れば天下の奇觀である。而も彼は自ら空に道を造り橋を架けて、それを渡らうとする大膽と勇氣とに驅られて居るのであつた。

彼はその頃勤めて居た學校へ通ふ道すがら、この橋の側を通りかゝつては考へた。――この橋は常には誰れも渡らない橋だ。それは舊い社會から脫け出して、新しい世界の生活を希ふ生の躍進の爲めに造られた橋だ。それを渡つて遙か彼岸に、美しい世界がある。疑問の未墾地がある。物語に見る謎の人々が居る。民衆の遊樂する所がある。皇しき白衣の女神が莊麗な殿堂に居り立つて、平和の舞を舞つて居る。豐饒な果樹園が朗らかな日光に輝いて居る。鳥は自由の翼を交はし正義の謠を歌つて居る。草や木は綠りの芽をぐん／＼伸ばして、それが持つた自然の力で美しい華を開かせて居る。――

村山は其の世界に到達し得た瞬間の自分を想像して見たそしてそこへ此の身を致す爲めには、其の間に如何なる困難が橫はるとも、一命を賭するに値すると彼は思つた。何うせ束の間の塵の命は、彼には彼岸に輝く自由の榮光を享樂すべき努力の代償であつた。來る日も來る日も切り詰めた因習の奴隷となつて、新綠の若葉の如き自由な生長の無い國の生活には、彼はもう倦々したのであつた？　そして新綠の生長を見て、彼はそれに、子供の時の樣に限り無き悅樂を感ぜずに反つて限り無き悲哀を覺えるのであつた！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

汝は天下の廣きに出で、自由な空氣の中に、草木の伸び行くが如く最も自然に、汝自身を生長せしむべく、汝の若き時を過せ。汝の爲めに取り殘され、汝の爲めに與へられた生活の爲めに、汝の若き時を過せ。』

さう云ふ內心の囁きを、彼以外の何者が聞いたであらうか。それに對する感激を、生命の躍動を、彼以外の何人が感じ得たであらうか。そして、さう云ふ自分の感動を彼は自分以外の何人に語り得たであらうか。親類の者にも、そして妻にさへも、彼はそれを語り得なかつたではないか？

さう云ふ運命の囁きに依つて、と云ふよりも生命の力に依つて、彼は動いて居るのであつた。その生きんとする力を以て、彼は自由に遊學し、自由に歌ひ、自由に財産を運用しようとした。そして、實生活上に於ける彼のさう云ふ自由な感情の流露に對して、凡そ世間は彼に好感を持たなかつた。

世間の大部分は因襲的な彼の妻登代子の味方であり、遺産の保守者であつた。そして彼等の或る者は村山の自由な自然な生長の姿を見て、それを愛する事なしに憎むのであつた。

『そんな勝手な事を云ふなら、一層の事、癖になるから、田地を皆取つちまへ。』

と云ふ者も彼の親類の中には在つた。

『併し、それも登代子が可哀想なばかりに――。』

と云ふ者もあつた。

世間の大人は因習と固定した道德と、無意味な法律の條文に囚はれて、所有權の主張に、自由な生長を忘れ、一時的な權利主義の爭ひに、自分を僞り、人を僞つて、金を儲ける爲めに、自分の人生に於ける本然の華をも見ずに日もこれに足らぬその間に、村山の子供はぬけぬけと伸び、ぐん／＼と生長した。村山も伸びた。そして樣々な障害を突き拔いて人間としての養分を吸つて生長した。

大學を出て、復び家庭の人となつた村山は毎日讀書と思索の生活に潛念した。登代子は子供を二人產み三人產んでも、矢張り十年一日の如く、昔ながらの家庭の女として、忠實に立働らいた。斯うして、村山の頭がだんだん肥えて太つて、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

廣い世界へ伸びて行くに反比例して、彼の家庭の經濟は日に日に小さく細く痩せて行くのであつた。そうした一家の經濟に就て、一向無關心で、何にも考へずに居ると思はれる様なお殿様振りの村山の生活に就て、登代子は絶えず不滿と不安とを感じずには居られなかつたのである。

萠え立つ様な青春の血潮の躍動して居る村山は、決して登代子が考へて居る様に、若い地主として暢氣ではなかつた。彼は毎朝早く起きて耕地へ出て、汗を出してせつせと働らく、周りの農夫の生活を見ると、現實的な生活力が彼の生命に溢れて來て、ぢつとしては居られない様になつた。斯うして毎日安閑として、何等の生産の勞働なしに、書齊の中に埋れて居る事が、何となく人間の僭越である様にも思はれた。そして、現實生活に於ける様々な美しい理想の光りが、彼の頭をかすめ通る時、彼の心は外的な活潑な運動の方へ動き出さずには居られない様になつた。古今東西の有ゆる賢哲の書を讀み盡さうと意氣込んだ彼も、漸く書齊の單調な生活に苦痛を覺える時が來た。

『あなた何うです、そんなに家にばかり居ないで、少し學校の方へでもお出なさる様にしては――その方が運動にもなりませうから。』

斯う登代子が彼に勸めた時、彼は全々それを輕蔑して、一蹴してしまふ譯にも行かなかつた。

『何か働らかなければならない。』

たとへ彼は周りの農夫達の様な筋肉勞働をする事が、彼の使命とする所の仕事ではないにしても、そして、彼は彼自身に、自分の存在理由に就て、たとへ自分は形の上に筋肉勞働の形式を取らないにしても、精神的には、創造活動に燃えて居るのだからと云ひ聞かせて居たにしても、彼には矢張り勞働は人間の最も神聖な生活の形式である事を否定する事が出來なかつた。

『あの農夫達は赤裸な無一物の境地の中から、自然の眞只中から、自分の本然の力を以て生産をやる。さうして得た粟の一粒にも、彼等は「是こそ我が獨自の所得なり、創造なり。」と、滿天下に向つて呼號し得る誇りを感じ得るのである。』

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さう思ふと、彼は農夫の力強い生活が、えも云はれなく懐まれ、遺産に依る若き地主としての自分の生活が愈々微力な弱小なものに思はれるのであつた。

『要するに、自分が斯うして毎日書齊の中に、不生産な生治を續けて居られるのも、遺産の力である。』

併し、それだから遺産は彼に取つて貴重なものであり・意義のあるものであるとは、彼には思へなかつた。

『遺產、それは俺の力を以て、俺が額に汗して得たものではない。俺に取ては全く偶然な力である。そして、俺は今その偶然の力に依つて生きて居るのである。本然の力に依つてではない。』

さう考へて見ると、彼は、彼の心に深く培はれ、そして絕えず醱酵しつゝある「偶像破壞」の精神と、實生活との矛盾を、此の上もなく不愉快な事に思ふのであつた。

『偶然の力は偶像の力である。そして今、自分はこの偶然の力に依りて生きて居るのである。何と云ふ自己に對する屈辱であらう?不忠實であらう?』

村山は是迄、周りの農夫に對し・登代子の親類一味に對して、何となく氣劣りのする卑屈な自分を・絕えず心苦しく思つて來たのであつたが、今、さうした卑屈な生活の原因が・「偶像の力に依つて」生きて來た生活に在る事を思ふと、彼は何よりも先づ、自分の生活を根抵から改革しなければならない必要に迫られた。

『さうだ・自分は是から社會へ出る第一步に於て、先づそれをやらなければならない。それをやらなければ・自分の生活は決して今より一步でも幸福なものになり得ようとは思へない。』

併し、村山は、今、その遺産から獨立して、何に依つて彼の生活を維持し發展させて行く事が出來るであらうか? 今の社會に、一人でも偶像の力に依らずに、生活を維持し發展させて行き得る樣な自由な個人があるであらうか?

社會改造家を以て自ら任ずる村山が、書齊の生活から、街頭の生活へ出るに當つて、最も興味を感じた生活の形式は・「小學校の敎員」、ではなく、藝術家としての敎育者であつた。それは彼の思想と情操とが、彼が社會上の生活形式を理想した、彼に獨自な無類なものであつた。彼は敎育者が來るべき幸福な社會を産み出す職分と使命とを持つた者である以上

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何としても、教育者はその精神に於て、情操に於て、當然藝術家でなければならないと考へた。

村山はさうした精神と情操とを以て、今の小學校教員の生活に就て考へて見る時、何時も失望させられてしまふのであつた。

彼の眼に映じた小學校教員と云ふ者は、決して教育者でもなければ、藝術家でもなかつた。彼等は社會改造家としての精神も無ければ氣魄もない一個の偶像の奴隷に過ぎなかつた。又、過去に於て一度、教員の養成所である師範學校から、小學校教員の生活に浸潤した經驗のある村山は、師範學校が偶像の奴隷を養成し、小學校教員としては又、偶像の奴隷たる事を要求する現在の教育制度の中に於て、彼の情操が要求する「藝術家としての教育者」の生活が、如何に絶望なものであるかを彼は知つて居た。さうした教育制度の下で生活する小學校教員の生活が、如何に退屈なものであり、不幸なものであるかを彼は餘りに知り過ぎて居た。だから、彼は實際活動に對する熱い思ひは燃えて居たが、今更、「小學校教員」にならうとは思はなかつた。たとへ、それは家庭に於ける「偶像の奴隷」の生活を脱するが爲めの方便であるにしても、一つの偶像の奴隷から免れる事に依つて、他の一つの偶像の奴隷となるのは、彼には全く無意味な事であつたからである。

それにしても、彼は自分の志す社會改造事業が、子供の生活に出發する事の何物にも優つて最も效果の著しいものであると云ふ信念と熱情とを失ふ事はなかつた。

『そこで、若し自分が小學校へ出るとすれば――』

と彼は考へた。

『今の教育の制度や、教員の勞働の報酬である月給――それは一家の生活に取つて、ほんの小遣錢に過ぎない端下月給であるが、村の役人や官吏などから、恩惠的に與へられ屈辱的なものである――を眼中に置かずに、自分の信ずる所を大膽に實驗する事にしよう。さうする爲めに、家庭に於ける偶像の奴隷は、暫らく忍ぶとして、さうする爲めて遺產は俺の理想の實驗費と見做して。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯うして、村山は取り敢へず、小學校教師として、名は地方長官の任命に依る小學校本科正教員として、仕方なしに小學校の舊い敎員制度の中へ入つて行く樣な事になつた。

併し、彼の周りの誰れが、村山のこの內心の聲を知つたであらう？　彼が人間として最も親しく深く交りを結んで居る登代子にさへも、彼のこの內心の姿は認められはしなかつた。登代子としては、折角金をかけて大學迄修めて來た夫が、中學校へ出ないで、小學校へ出るなんか、自分の經濟からも、世間に對する顏向けからも、餘り芳ばしくは思へなかつたが、それでも、今迄の樣に、何にもしずに、毎日書齋の中に燻ぶつて居るよりは、好い事に思へたのであつた。

『中學校へ出られるものを、中學校へ出たら好ささうなものだね。今迄、さん〳〵東京で金を使つて來て、小學校へ出て居ちや間尺に乘らないぢやないか。小學校へ出る位なら、何も大骨折つて、東京くんだりまで出て行つて、金を使つて來るにや及ばないぢやないか。馬鹿らしい。お前も餘程變り者だね。』

勘定高い登代子の母は斯う云つて、盛んに村山を批難したものであつた。

『へ、、、ン。』

村山は村山で、斯う云ふ時には、何時も鼻であしらつて苦笑ひした。

『へ、、ンぢやありませんよ。お前の樣な事をして居た日にや、子供もだん〳〵多くなるのに、しまひにや、顎を釣へ懸ける樣な始末になつちまひますよ。』

『ハイ〳〵、今に高等文官の試驗でも通つたら、××縣知事、高等官一等年俸何千圓てなことになりませう。』

村山は今迄の書齋生活、斯う云ふ連中には七面倒であつたから、申譯的に、さう云ふ意味で胡魔化して居たのであつたが、愈々小學校敎員として化けの皮を現れた今も、矢張りさう云つて居た。彼は決して經濟の事を考へない男でもなければ、それに無關心で居られる男でもなかつたが貨殖の興味よりも、遺產を使ふ事に興味を持つて居た事は確かであつた。

屍に咲く（三齣）

上野虎雄

人

女　お駒
男……勘太（女の先夫）
老人　一の情夫
若者　二の情夫
僧　木像にも化ける。

所

夜の古寺
影繪……墓場
舞臺……本堂

上演の手法は前期未來派即ち未來派表現主義ダダイズムのいづれにてもよし。但し、現在（影繪）と過去（舞臺實演）との連結は有機的になすこと。

墓　場（聯繪）

○舞臺の額縁（プロシニヤム）にキネマ式乃至引幕式に布を垂る。布の色は茶褐色。

奥より强烈な白のシムプル光（ひかり）。

影――

數々の石塔墓、土まんぢう、墓印、夥しき卒塔婆、草花、破れた高張提灯二三さしかぶさつた木の枝等。

それに中央の蓮の花の出た土まんぢうを圍んだ三人、痩せた若者と肥つた老人とが跣足で鍬や土運びを携へ、今や「お駒の墓」あばきにとりかゝる。和尙は傍觀念踊、南無阿彌陀佛々々々々々々々々々……

僧　何はともあれ、ほとけの墓から蓮の花が出る！　これア奇蹟だ奇蹟だ、前代未聞の奇蹟だ！　ささ、お二人とも、花びら一つ落さぬやう、そろそろと始めなさい。

若者　…………七つの卒塔婆に根が生えたのか、いくら力んでも抜けないで困る。

老人　そんな筈はないが、どうれ。……それそれ此のとほり立派に抜けたではないか。お前は駄目だな。卒塔婆ぐらひを抜きえないで墓標（はかじるし）はどうするつもりぢや。

若者　いや最う私には、死人の堀り返すなんてことは薄氣味が惡くて迚もできないよ。おぢいさん一人でやつてくれ。

老人　なんだと！　男盛りの癖に。ぢや年よりの俺には尙更能きねえ。止しだ止しだ。

僧　では、あの、のんだくれの勘太を呼んで來いとでも云はつしやるのか。

老人　まさか、あの黑猩々にほとけの骨までしやぶらせる量見ぢやあるめえがな。

若者　墓はお駒さの墓だ。それに勘太さとお駒さの緣は夙に切れてゐた。

老人　だから斯うして俺とお前が供養をしてゐる譯ぢや。さゝ、何も怖がることはない。佛はお駒さだで、念佛誦へながら供養をしてあげよう。

若者　私はいやだ。お駒さんの墓をあばくなんて申譯がない。ほとけが泣く。

僧　佛が泣く？　佛はいくら泣いても願つても成佛ができないから、こんな眞つ白な、蓮の花を咲かせたのだ。みんなお前方の供養が足りなかつたせいだ。

若者　供養だつたつら和尚さんこそ、その勤だよ。

僧　なに！　あなたはこの俺を侮するのか！　俺とお駒さとがねんごろだつたとでも云ふのか。

老人　これこれ若い衆。お駒さはお前に抱かれたまゝ氣が狂つて、死んだんだよ。

若者　ばかな！　お駒さんは本堂の木像樣に抱かれたまゝ氣が狂つて、死んだんだ。

僧　神樣ですぞ！　お言葉をつゝしむがいゝ。

若者　誰が何と云つても、一番目は勘太さん、二番目が此處にゐる米屋の御隱居さん、三番目はわたし、最後は本堂の木像樣だ、神樣だ。だから和尙さんが神樣の身代りになれ。

僧　おや、あくまで神樣に物慾があると仰言るのか！　いや神樣が婆婆の取沙汰になびくと云はつしやるのか。

老人　よろしいよろしい。さてはこの若い衆は獸ださうな。獸にはお題目の有難さは解せないはづ、人間のうちで一番お終ひ迄お駒さと知合だつたのはこの俺だ。人間の供養は人間に限る。俺が立派に成佛さしてあげるとも。

僧　左樣々々、獸にさせるのは勿體ない。

老人　それにしても、俺といふ人間を袖にして、お駒さはなんで獸になづいたのか。

僧　叱ツ！　ほとけに怨言は（小聲）地獄の沙汰……。

老人　いや、これは御忽粗を……（緘口）……おゝ、はやお線香が消えました。それにはお蠟燭のあかりも心細くなつた。

僧　えゝ詮方がない。俺が取つて參じませう。（去る、若者蹣む）

老人　では、よろしくな、お願ひしますぢや。……あゝこれで佛もやがて樂々と成佛さつしやるぢやろ。……(間)
さて、また、今夜は何と結構なお月夜樣ぢや。……たゞしろじろと……(間)
おや、……おや、何だ……人影だ、……人影だ……。
やツ、やツ、勘太さだ！(あはてる。若者立あがる)

男　こいつア！　違え無え。酒屋の噂どほりだ！　へん、女えら、お駒の墓をどうするんだ。なえおい！　逃げようたつて今更駄目だぞい。(醉つぱらつてゐる)

老人　おい／＼勘太さや、もつと和穩しく、靜かに願ひますぢや。

男　奴！　米屋の隱居だナ、老耄れめ。引ん込んでゐやがれ。

若者　まだづぶ醉ひに呑みやがつたな。

男　な何だと、靑二才。じやれじやれしやがつて！　汝えらおらの面を忘れはしめえ。

老人　勘太……勘太さや、ほら、ほら、お前にはあのお駒さの泣聲が聞えんぢやろ。

男　えい！　この老耄れ。おらのせいだらう、その泣聲はな！　おらのせいだらう。……やい、返事できぬえのか、靑二才。お駒泣かしたなァ一體、誰だ！　畜生。

若者　人間の所業ではない、赤い坊が死んだからだ。

男　うむ、その餓兒は一體誰の胤だ！　白狀しやがれ、薄のろめ。都のこたア知らねえが。この村ぢや今業平も無えもんだ。それに親爺の田圃を乘物で通りやがつて、揚句の果は女たらしが、好い面の皮だ、態ア見ろい。

老人　勘太……お前は此處へ何しに來たのだ。

男　そりやどつちの言草だア。お駒はおらの嬶だぞ。

若者　今となつてもお前の女房だといへるか。

男　ぢや汝え、ぢや誰の嬶だ。

老人　なんぼ可愛い女房でも、死んだら佛様だ。ガミガミ怒鳴らずと念佛の一つも誦へてやれよ。

男　ふん、念佛だつて。よし！　御免遊ばせお釋迦樣だ。あま茶でかつぷり、あま茶でかつぷり、よ、い、と、な、ありやさツさア、だ（小踊りはじめる）

老人　馬鹿！……馬鹿。（止める）

男　さうだとも、おら馬鹿だよ。意氣地無しだよ！　自分(てめえ)の嬶をお前(めえ)に寢取られ、青二才に寢取られしてな。おら馬鹿な馬車挽だよ。

老人　……　……　……。

男　おい！　米屋の御隱居さア。好い加減な生齡しやがつて、やれ米だ、それ粟だと吝臭せえ端下金でお駒を騙しやがつて、なアおい！死んだ餓鬼だつてお前の胤だぞ。おらアとつくにさう睨んでゐるんだ。

老人　おい、勘太さ、此處は佛の新墓だよ。

男　その墓をよ、いつてえ汝えらどうしようつてんだ。……樣アみやがれ、畜生！　返事なんかできやしめえ。

老人　萬事和尙樣まかぜだ。和尙樣のお指圖どほりだよ。

男　なに、和尙だ。その和尙はどこに居るんだ。へん、出鱈目だと承知じねえぞ。

若者　たつた今本堂へ行つたばかりだ。

男　眞實か！　よし、ぢや、今度は彼奴だ。……（よろよろと步む）だが、和尙は金持だからな。こいつあまた杯一(べえいち)きこし召さうといふもんだ。へつへつへへ……………。（去る）

若者　あの男は、腸(はらわた)が腐るまで飲まなくちや滿足できないとみえる。

老人　あんなやくざ者と五年間、お駒さもよくよく辛棒ができたものだ。

若者　だが、亡なつた赤ン坊のことを始終口癖にいふのが、どうも私は腑に落ちない。

老人　なあに、醉つぱらいの愚痴だとも、わるい癖だよ。……　……だが、あの調子で本堂へ行つたら和尙さが困るだらう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行つてみなければ。

若者　さうだな……。

老人　あゝ、お蠟燭の灯が……遂々消えてしまつた……。

――閉――

本　堂　（墓場より六十日ほど過去）

○舞臺うす暗し

中央奥神棚

神棚の左側に眞の木像、右側に僧の化けたる佛像。間隔を置いて五つの蠟燭がある。

お駒は髮ふり亂して神前に蹈る。裝束は白。

女　神樣、神樣。妾は呑だくれの馭者とくされ緣を切つた哀れな女で。

化像　嘘いつはりを云ふな。立派な亭主を捨てて間男するやうな、そんな僧たらしいをなごは地獄の鬼ぢやわい。

女　なんのなんの神樣彼の罪劫は村中誰一人知らない者はありませぬ。博奕といつては妾の着物を剝いで行き、酒代といつては米櫃の中を浚つて行くやうな男が、なんで立派な亭主でせうか。四肢を挫かれても髮の毛を引き搖られても、まだ〳〵辛棒せいと仰言るなら、神樣　此の世には妾の浮ぶ瀬が無いのでムいますか。

化像　だがをなご。お前の亭主は醉つぱらつてはゐるが、只今現にこのお寺の庫裡へ來て、お前の痛氣を心配してゐるの

女　それは神樣。おやツ！……お燈明が一つ、消えてしまつた……。
化像　だぞ。
化像　その酒呑みの亭主ばかりではない。あの信心深い米屋の老人も來てゐるのぢや。お前は每晩々々あの老人までも誨くらかしたのぢやな。お前は、をなど狐か、をなど狸か。
女　いゝえ、あれは眞つ晝間ばかりです。そして一ゝ妾が御隱居所へ參つて御用を足したのです。妾の生命も赤ン坊の生命もそれでやつとつながれたのです。が神樣、それも惡いと仰言いますなら、あなたは妾と赤ん坊とに死んで了へと仰言るのです。
化像　それなら。いまになつて何故捨てたのだ。可哀さうに、あの老人はお前の病氣を是非とも御祈禱で癒してくれ、と願をかけてゐるのだぞ。何故捨てたのだ。
女　それは神樣。おやツ……お燈明はまた一つ……消えた………。
化像　それはおほ方、あの若い男が出來たからぢやろ。あの若い男もいまちやんと此處へ呼びよせてゐるのだぞ。あの若者はもともと腰の病氣にかかつてゐたのだが、此頃ははや薄馬鹿になつたぞ。お前のため生血を吸ひとられたのぢ。お前はきつと鬼ぢやな、きつと蛇ぢやな。
女　それは神樣。なるほど妾よりも確かに年下には違ひないのです。けれどもお心もお體もあの人は中々丈夫で、丸で妾よりも兄貴だつたのです。おまけに妾のいふことも赤ン坊のねだることもみんなきいてくれる人ですから、あの人は妾の生れて始めて見た生き佛と同じでムいます。………まあ、何と……氣味が惡い……み燈がまた一つ………。
化像　よろしい……それで漸くお前が赤ん坊を絞め殺した理由が解つた。實に恐ろしいをなごだ。お前はあの若者とぐるになつて邪魔者の赤ン坊を殺したのだな。
女　えゝツ！　それでは神樣はまだ、妾が今夜まで丁度三七二十一日の間、あの亡つた子供を返して戴くやうに、お祈禱してゐることを、御存じないのでムいますか。

化像　此の世では死人は再び生き蘇らないことはお前はちやんと知つてゐる筈だ。……お前は若者の赤ン坊が欲しいのだらうが。はつきりと云へ！

女　いゝえ、いゝえ。赤ン坊だつたら誰のでも構はないから何卒恵んで下さい。（立ち上る）

化像　本當に誰の子でも構はないのか。

女　えゝえ！　誰の子でもよいから、何卒一人だけめぐんで下さい。

化像　たつた一人ではいけない、三人いちどきにめぐんでやらう。

女　ですけれど、たつたひとりで、三人もの赤ン坊はとても妾には育て切れません。

化像　三人だ三人だ！　でなければ相叶はぬ。

女　それはまた何故でございますか。

化像　よく考へてみれば直ぐわかることだ。（蠟燭また一つ消える）

女　あゝ神樣。あなたは、何故そんなに、ひとつひとつ、あかりを消して…………。

化像　お前は米屋の隠居所へ行くやうになつてからは亭主との緣は立派に切つてゐたか。

女　いえ。毎晩のやうにひどひ目にあはされました。

化像　若者と一緒になつてからはどうぢや。

女　まだやつぱり、しつこくつけ廻されました。

化像　その時には米屋の老人とは？

女　あの人の體が思ふやうに働けないときは時々米や麥を貰ひに行きました。

化像　よろしい！　それではお前はいちどきに三人の亭主を抱へてゐたのぢやな。

女　…………。

化像　その日その日の生活（くらし）が苦しくなると、お前はきつとまた男を拵へるぢあろ。

女 ……………………。

化像 まだ幾人も幾人も男を拵へるつもりぢやろ。

女 ほゝゝゝ、ほゝゝゝ！

化像 をなご！ お前はこの俺をいつたい誰だと思ふか。

女 ほゝゝゝゝ、神様のくせに。

化像 ふゝゝゝ 最後の蠟燭を吹き消す）いや、わしも人間だよ……人間だよ（動き出す）……。

女 噓！ 噓！ まあ何故あかりを消して了つたのでせう。神様のいたづらもの！ ほゝゝゝゝ（庫裡の隙灯うす暮の如くさせるのみ）あら、そんな亂暴はいけません、足をすくつちや嫌だ。倒れる音）何をするのです……ほゝゝゝ、まあ…… 神様は啞(おし)だ、力の强い啞だ。……えゝ、……（ ）……………………

○黒い化像の去る音。女突然はね起き、神棚の造花の白蓮をとり、蜻蛉釣りのごとく、闇にヒイラ、ヒラヒラ舞ひはじめ、漸次加速度、花をくるくる振翳し、狂ひに狂つて堂と倒れる。……間……。

足音…… 庫裡の扉開く、薄明、僧登場、黒い着物。…… やがて老人、若者、男も來る。

僧 おや、眞つ暗だ！ 最うお駒さは歸つたのか。……それにお祈願(いのり)はすんだのかしら。皆さん皆さん、速く來なさい！ 今夜は風もないのに、五つの御燈明がすつかり消えてゐる。

老人 はてな！ 誰か移し火をお持ちか。

若者 きつと、歸りしなにお駒さが消したのぢやろ。

僧 とに角 移し火を、誰か移し火を。

老人 さ、わしは生憎ぢや、若い衆お前はお持ちか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若者　私も庫裡へ置き忘れて來た。勘太さはどうぢやろ。

老人　勘太さや勘太さ。お前マッチをお持ちか、

男　なあんだ、お先まつ暗かい。よし來た　さあ！　だが少々なまぐせかも分らぬぞ。はゝゝゝ。

僧　や、ありがと、えゝと、此のあたりだな。（默す）おやお蠟燭はまだ半分も殘つてゐる。（消える）やッ、こいつはしまつた。このマッチは細軸だな。さ、今度こそ。

女　あ!!　あ!!　あ！　ゝゝゝ……………。

男　へ!!　へ！　へ！　へ！　へ！

老人　魂化たよお駒さ！　あんな人が惡いな。

若者　實際！　おどいたよ。

男　へつへゝゝ。（踊る）

僧　そして、願ひ事はもう濟ましやつたのか。……えゝ、お駒さ。

女　……………………。

老人　……返事が無い……。これこれ、お駒さ。みんなであんたのお祈りを待つてゐたのぞい。

男　へつへつへゝゝ。（僧五つの燈を點す）

若者　さうだ、氣を失つてゐる樣だ。

女　あゝまぶしい！　あかりは消して。

老人　和尚樣、速くお經を願ひますぢや。

僧　ほんに、左樣々々。

女　いやだ、いやだ！（蓮の花を投げつける）

老人　これ！　お駒さ。和尚樣に何をする。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女　お前方こそ、何をする。

若者　お前の病氣の御祈禱だよ。

僧　否ンやいや・神様から坊やを貰ふんぢや。

女　ほゝゝゝ、妾は赤ン坊を三人も抱くんだ、三人。五人、十人百人・もつともつと、妾には幾らでも赤ン坊ができるよ
たつた一人はいやぢや、いやぢや・いやぢや……（掌の珠數を引きむしる）

男　おや！　お前そんな立派なお珠數をどうして持つてる？　えゝ。大した代物だぞ。（はひよる）

女　これか、これは神様のぢや。神様から貰つたのぢや。木像様は妾を好いてゐらつしやる。

老人　おほ、お和尚様。あなたのお珠數を！（僧驚く）

女　嘘だ嘘だ。これは神様のぢや。木像様のぢや。（懷へ抱いて・やるまいとする）

僧　いや、なに、あのお珠數はな。それ、その、それ、御像様のお手首にかけてあつたのぢや。

老人　なるほど……。

男　へつへつへゝゝ。

若者　和尚様、なぜそんなに燈明を消して了はれるか。

僧　そろそろ退參致さう。憑きもの拂ひは、今夜は所詮駄目ぢやで。

老人　なるほど、あれではお題目の御利益もあるまい。喃ら若いの。

男　へゝゝゝ。ところでお駒、全く久しぶりだな、一緒に庫裡へ行からぜ。酒だつて、肴だつて、一切合切向ふ持ちの
只勿だぜ。（無理に手をひかうとする）

若者　おいこら！（男を止め）亂暴は止せ。

男　へつへつへ、仕方がねえ、約束だ（放す）

老人　さゝ、勘太さや・お前の對手はこのわしだよ。（男の手をとる）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

男　うまくやつてらあ、お駒。おめえ今夜のおひけは木像様だぞ。へつへ、神様と朝寝か、あばよ、へつへ、うまくやつてら。(最後の灯が渉える)ちえツ、また眞つ暗闇か。おい、お寺の大將。まあ、待ちねえよ。(最後に 場)……………………。

墓場 (影繪)

〇堀返され盛り上つた土。仕事は大ぶん進んでゐる。
若者は墓穴に入り時々頭を現はす。
老人は上にあつて土をはねる役。
僧は鉦を捧じ蓮の花を保つたまゝ無言にて傍觀。
勘太は傍に腰かけて居眠りしてゐる。
墓堀りのパントマイムのまゝ、暫く間。

僧　……勘太さや、そこにゐると頭から赤土のはねをかぶるぞ。それ、その石塔のところへ後すさりだ。
老人　やツ！　棺桶の蓋が見えた。
若者　はや二た月も經つたのに、まだ白木の匂ひが生々しい。
僧　勘太さ、勘太さ。愈々だよ。さあ此處へ來て此の花を持つてゐてくれよ。
老人　勘太！　お駒さだぞ。
男　えい、どれ、(立上る)いや、全く久しぶりだな。
若者　やツ、蓮の花は、棺桶の眞中から出てゐる！
老人　えゝツ。

僧　これ若い衆、わしと代つてくれよ。（仕度する）
老人　いや・わしに代らして貰ひたい。（仕度する）
僧　それはいけない・俗人には佛力が無いのぢや。（小競り合ふ）
若者　おほ！　蓮の根が、……蓮の根が……。
老人　蓮の根が！
僧　どうしたのぢや！
若者　お駒さの口から出てゐる。
皆々　…………
　　　…………
男　へゝゝゝゝ……（間）
僧　（小聲）南無阿彌陀佛々々々々々々々（老人同じく小聲にて和す）…………。

—闇—

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

美學者の戀

村松正俊

あれが有名な美學者たちですよ、みんな御歴々で
でもエピゴーネンにはちがひありませんね、觀念派ですよ
あの威張つた風はどうです、あゝいふ觀念のなかから、
眞の藝術や、美の理想や、音樂や、文學が生れるのです。

むかしの作品はみんな理想で、外國の文學はみんな模範で
さうしてわれわれの詩や、音樂や、小説は墮落したものださうです。
ですからあの通り人を見下して御自慢なのでせう。
結構なことです、日本も追ひ〳〵偉い美學者が出るでせう

だがあの人たちにも戀があるのですよ、妙でせう
自分で繪も詩もうたも分らないくせに
戀だけは人なみにすると見えます、それは理想でせうもの……。

あの人たちの色文は定めて天下の名文でせう
女子大學生のやうに主義や精神や議論の戀なのです
でも結婚が落ちつく先で、語學教師が目的と聞けば——どうです。

血痕

松本淳三

ある日であつた。

ひどい雨が朝からどしやぶりに降つてゐた。

常から暗い俺の心は、いやが上にも暗く沈んだ。そしてもつと暗い氣持ちを招いたことには、昨夜から何より必要な米が無かつた。おまけに財布は逆さに振つても、芋を買ふだけの金さへなかつた。

で、雨のことより食はねば居れない米の問題――それが俺の、氣持ちをひどく腐らせこづいた。

「どうしませうねえ?』

妻は朝からおど／＼してゐた。

『そうだな?』

俺に確信は一つもなかつた。

(誰か友人を訪ねて行つたら、一圓位は貸して呉れるが……)

腹の中では、そんなことさへ考へた。

が、そんならすぐさま、誰かの處へ行けばいゝのに、そうするだけの元氣も無かつた。外へ出るのがたまらなかつた。

それに幾分風邪らしい熱がすべての、俺の發奮を防げた。――……………、俺はそのまゝ深い沈默を守つてゐた。

と、突然であつた。

『ね、あたし、前の下駄屋さんの羽織の縫賃……あれね、あれを前借りして來ませうか?』

妻は眞面目に相談しかけた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下駄屋さんの羽織と言ふのは、まだ反物の儘で手さへつけない——その縫物のことだつた。が、原稿料の前借りならずゐ分聞いてる。そして自分にも覺えがあることだけれども、縫物の仕立賃の前借りばかりは、いまだ曾つて聞かない珍妙なことだつた。

『いや待て、そんなことをしたつて』

俺は一先づ彼女の意志を遮つた。

『だつてなんにも……いゝ考へが無いんですもの……』

俺は質屋へ、持つて行く物は無いかと、頭の中で考へ探した。しかし、悲しいかな何にも無かつた。空つぽになつた古い支那カバンが二つ——押入れの中に坐つて、ぢつと泣いてる姿が明瞭に思ひやられた。

『なにかないかな?』

それでも俺は諦めなかつた。が、矢つ張り其處には何にも無かつた、カラーの古いの、汚れた靴足袋、彼女の腰巻き——そうしたものを除けては一つも、めぼしいものが其處になかつた。

(あゝあ、それにしてもずゐ分質屋へ入れたものだな?)

俺は一寸淋しい氣がした。

しかしいくら藻掻いたところで、金になるものは何處にもなかつた。全くどうにも仕方がなかつた。最後の手段だ!遂々大事な商賣道具の、獨逸辭典を賣り飛ばすことに決心した。

『ね、そんなら私が、一寸行つて參りますから』

妻は自分で、すぐさま立つて行かうとした。然し雨はいよ〳〵烈しく、風さへがた〳〵雨戸を搖らした。

『いや待て、俺が行つてやらうか!』

『いゝえ、いゝんですの、貴方はお風がひどくなつては困るんですから、ね、待つてて下さい』

そこで遂々、妻が出て行くことにきまつた。

『いくら位に申しましたら？』

『さあ……二圓位に言つたらどうだい？　大分使つてゐるからなあ！……』

『……で、お米はどれ程？』

『うん、一升位でいゝだらう。そのうち何とかしてやるから、』

青い木綿の風呂敷に、紅い辭典は極めて丁寧に包まれた。妻の胸にしつかり抱かれた。

『では一寸行つて參りますから』

ことく二階をおりてゆく音が聞へた。

約三十分の時が流れた。

パサくッと言ふ音が聞へた。階下で傘をすぼめる彼女の音だつた。それからトンく馬鹿に元氣な、階段を上る跫音がはつきり聞へた。

『おゝ、早かつたな！』

『えゝ、ずゐ分ひどい雨なんですもの』

彼女は廊下で、濡れた著物の雫をはたいた。それから風呂敷の米をそつと下におろした。そして、

『ね！……二圓なの……』

嬉しそうにそつと笑つた。

『ほう！　そいつはどうもよく賣れたな！』

『えゝ、はじめね、主人が、一圓五十錢と言つてたの、それを遂々二圓に價上げさしたんですもの……』

價上げ……そうした彼女の、言葉が可笑しくてたまらなかつた。（いろんな言葉を覺えて平氣で使つてゐる！）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、俺のそうした微笑は妻には、たゞお使ひをして來た褒美に、貰つた感謝の微笑だらうと、それより以外の意味を彼女は察しなかつた。

（二圓に賣つた……お米が一升……そして現金一圓いくら殘つてゐる！　）妻にはそうしたことが何より、嬉しいものに思はれてゐるらしかつた。

けれども俺は、何より彼女の、右の肩からずつと裾までびしよ濡れに濡れた姿が、可愛そうでたまらなかつた。で

『おい、一寸その濡れたところを拭いたらどうだい？……』そう言ふと

『ええ、風が吹くので傘がおちよこになつたんですもの。』

やがて彼女は乾いたタオルで、肩をごし／＼拭かうとした。が、ちつとやそつと拭いたところで、全部綺麗に拭き取ることが出來なかつた。で、とう／＼しまひに、羽織をぬいで拭かうとした。

……と、すつぽり羽織が肩からすべつた。

その時であつた。

あつ！（何と！　何と言ふ嫌な事實だ！）肩から羽織が、すつぽりと落ちた瞬間！　お、（俺の眼よめくらになれ！）忽ち俺はぎくりとした。形容しがたい、ショックを強く心に感じた。見てならないものを見付けた。それが苦しくてたまらなかつた。

――まるく、赤黒く、二錢銅貨の、大きさほどある……嫌なにじみが、……彼女の痩せた腰の眞下に……それこそ確かに、うつかりしてゐた間に洩らした、女につきものの月の××――ぢつとにじんで……それだつた。

……ギユウツ……と俺は眼をつむつた。堅く堅く眼をつむつた。けれども矢つ張り、それが眼の先に執念く浮んだ。

……頭をふつた。自棄に、烈しく、右に左に、ふつた。ゆすつた。それでも矢つ張り赤い黒い二錢銅貨が、……俺は最早たまらなかつた。

すべての貧困、すべての窮迫、すべての醜い……二人のどん底の生活が、そこに一點凝り固つたかのやうに、或はまた、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人の呪ひが、二人の苦惱が、一つになつて腐つた、とろけた、その象徴であるやうに、俺の狼敗は苦痛に代つた。俺の羞恥は恐怖に代つた。名狀しがたい心の動搖——俺はぼろ〳〵涙が出るのを、こらえるだけの力がなかつた。

（おゝ、あはれな女よ！）

苦しみを共にしてゐる彼女に對する、感謝が胸の底から溢れた。同時にそうした彼女についてる、嫌なにじみを、即坐に何處かへ隱してやりたくてたまらなかつた。

（早く着てくれ！　早く着てくれ！　羽織を！　羽織を！………）俺は心にそれを念じた、一生懸命にそれを念じた。しかし俺がいくら一人でやきもきしたつて、いら〳〵したつて、彼女は少しも氣が付かなかつた。氣が付かないのは無理もなかつた。

が、その時ふつとどうしたはづみか？……偶然出合つた二人の瞳の（それは實に偶然であつた）——結果は寧ろ俺の顏付き……彼女はそれを不思議に思つた。

『おや！　貴方どうかなさつたんです？　大變御顏が青くつて？………』

彼女は不審そうに訊ねて來た。

おゝ、俺は益々、苦しい頂上に悶絶した。……瞬間であつた。

『おい！　馬鹿！　風を、風邪を引くのに！　早くその羽織を着ないか！………』

俺は大きい聲を絞つて、いきなり彼女を、叱つた。どなつた。

——一九二二、九、一〇——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おい！仲間

今野賢三

おい、仲間！……。

俺にはてめいたちの面は見えねえんだがよ。四角な箱みていな、留置所のなかにゐるんだが……おれの心のなかぢや、てめいたちを一生懸命に呼んでるんだ。なア、おい！ 心のどん底から呼んでるんだぜ。おれは最う酔拂つちやアゐねえんだ。てめいたちにわかるだらう。おれがシラフだつてえことが……。なア、おい、おれは二十日の拘留をくらつちやつたんだ。ちよいと酔拂つちやつたおかげで、二十日間ぶちこまれるんだ。くん、笑はせやがらア……。

最う夜更けなんだ。お巡りの野郎、だんまりで窓の外をガチアリ〳〵歩いてらア。

ホ、月が見えるぜ。高い窓から卵色の片割月が、ちつとばかりのぞいてらア……。

可笑しいや――おれは生れてはじめて、暗い部屋へさし込む月の光りつてえ奴を、見たやうな氣がするぜ。なるほど考へて見ると、其の日その日のくらしに追はれてゐる俺には、月の光りを見るなんて、しやれた眞似をする暇がなかつたんだからな。

おれの手もずゐぶんふしくれたつたものだ。

年から年ぢゆう、つるツばしや、ショベルばかりつかんでゐるからだ。

月の光りに、おれの手をかざして見ると、おれの手のやうな氣がしねえや……ほんたうに！ まるで死人の手のやうだ薄氣味わるいこつた……。

ところで、おい、仲間！ てめいたちには、おれがなんのためにふんづかまつたか、わかるめい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聽いてくんな。かうなんだ。

こんないま〱しいことア、あれアしねえよ。うちには、よぼ〱のおふくろがおれを待つてゐるんだ。おふくろのことを考へると涙が出らア、笑ふなよ。おれだつて人間だ。ひと一倍の涙はあらアな。

ゆうべはな、おれんとこの腹かけに　ちつとばかり小錢がへいつてゐたんだ。てめいたちも知つてるとほり、永い間わづらつたかかアに死なれてよ、世の中は面白くねえ〱と思つてゐたおれだ。なにを考へても、なにを見ても、癪にさわつて〱、やけくそに腹の立つやうになつたおれだ。考へても見てくんな、おれたちがどんなにあせつたつて、しやつちよこだちしたつて、氣ままに世の中を送られやしねえぜ。おれだつて人間だ。つまんねえ〱つて日を送つてゐたかアねいやな。たまには面白くなりていや。往來を見な！　自動車がとんで歩かア。いゝ女が乘つてるな！　と思つてうつかり見ようとすると、眼のなかへ埃をくらはして飛んで行くんだ。おれたちを、ほこりまでも馬鹿にしてやがるんだ。おい仲間！　てめいたちはいま〱しく思はねえのか！……それで、おれは酒を飲んだのよ。ちいつとばかり面白くなりていと思つて、酒を飲んだ。飲んだからつて、自分がわからなくなるまで醉はなけア、面白くなれねいんだ。だがよ。おれはめつたに醉はねえんだぜ。ところが、なア、おい、ゆうべばかりは醉つちやつた。空ッ腹に飲んだからまわりが早いや。……醉拂つちやつた。いゝ氣持に醉拂つちやつた。おれは、大きな聲で唄つてよ、絆天はうるせいから肩にひつかけて、酒場から出たんだ。なア、おい、おれは覺えてるぜ。醉拂つて、大手を振つて電車どほりへ出たときは。まつたくいゝ氣持だつた。誰にも遠慮しやしねい。誰だつて恐れるものはありやしねい。おれは……覺えてるぜ。……忘れたところも、わかんないところもあるがよ……。覺えてらア。電車を止めたつてことはなア……どうしてあんな氣持になつたか、解んねえが、電車の前に、兩手をひろげて立ちはだかつたんだ。すると大騷ぎよ。車掌の奴、降りて來て呶鳴る。人だかりがする。お巡りが飛んで來る。おれはます〱面白くなつちやつた。有頂天になつちやつた。誰でも喧嘩する氣になつちやつた。大勢わい〱騷ぐのが面白くつて〱、喧嘩して見たかつたんだ。だがよ。待つてくんな。おれは醉拂つても覺えてるぜ。おれから喧嘩をふつかけやしねえんだ。お巡りがおれをなぐりやがつた。あんまり解んねえぢやねえか。なアお

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い、聽いてくんな。お巡りがさきになぐつたんだぜ。それだから、俺は腹が立つた。思ひ切りあばれなけや、腹の虫が承知出來なくなつたんだ。どんな、あばれかたをしたか、それまでは覺えてゐねいんだがよ……そのおかげで、今朝眼が醒めると、こんな箱の中にぶちこまれてゐたんだ。おまけに二十日の拘留だ。おふくろはちつとも知らずにゐるだらう。米が無くて困つてゐるに逢ひねい。米を買ふ金まで、飲んぢやつたんだ。おふくろにはすまねい。そ、そのわけをお巡りに言つたがゆるしちやくれねい。へん、勝手にしろえ。おれだつて人間だ。お、覺えてろよ！ほんたうに！おれたちは、な。醉拂ひでもしなけりや、大手を振つて、往來を歩くことも出來ねいんだ。誰だつて、おれたちを人間だと思つて見てくれねいやうな氣がするんだ。ひがみかも知れねいけどもよ……だが……みんな人間面しやがつて、あんまりなめるない！おれたちだつて血が通つてらアな、どうしてくれる！おい、仲間！恨みだぜ！恨みだぜ！世の中アみんな、目茶苦茶にしなけや承知出來ねいんだぜ！……なアおい、おれア、ゾク〳〵さびしくなつて來た。なんだか涙が出さうだぜ。笑つてくれるなよ。おふくろが可愛想でなア。おい、仲間！てめいたちの手が握りてい。誰よりもてめいたちの手が握りてい！、おゝおれはさびしくなつて來た。おい、おい、仲間、聞えねえいのかッ！おい！仲間ッ！……。（ある長編の一節

來月豫告――來月は全誌を擧げてロシヤ革命紀念號にする。

「革命の善惡」（マキシム、ゴルキー）、「ゴルキーに與ふ」カール・ラデック（カールラデック）、「飢え」、等々を始めとして、金子洋文萩原恭次郎其他の小說、村松正俊、平林初之輔、津田光造、小牧近江、佐々木孝丸、松本淳三等の批評を滿載する。特にその批評に就ては今後益々力を傾けるつもりでゐる。

暴風雨

松本弘二

一

雨のために濡れ鼠になつて、しかも、五月の末といふのに冬外套を着てゐるものだから、暑さとじめ〳〵した氣持惡さとで氣を腐らしながら、彼は殆んどがら開きの省電に腰をおろしてゐた。

強い風を受けた雨が、彼の直ぐ後の窓へ烈しい音をたてゝ打ち當つて來る。彼は車內を見廻はした。前部の方に二三人の人がゐるきりで、後半には彼の他は誰もゐない。會社員や學生達が出かけるには少し遲い時間であり、それに雨も烈しいのだから、下町へ出る人も少ないのだらう。

彼は帽子を脫いで膝の上に置いてから、頭を硝子窓に押し當てながら、思ひ切り眼をつぶつた。憂鬱と、不機嫌な氣持を何うにかして追ひ遣り度いと思ひ始めたからだ。殊に、近來は不機嫌で憂鬱で、硝子壜でも瀨戶物でもいゝから、出來るだけ角ばつた石に打ちつけて、痛快に壞いて見度い。粉々になつて飛ぶ破片を眺めたら、その瞬間の音響を聞いたりして見度い。そんな氣持が、段々重つて來る。硝子壜が粉微塵に割れた後の、すつきりした心持といつたらどんなだらうと、さう思ひつめて來るともうたまらないのだ。一刻もぢつとしてはゐられない氣がする。それから、彼は又眼を瞪いて窓の外を見た。線路に添ふて、春ならば淡紅の輕薄な花を咲かして、それもほんの少しの間、直ぐその後は雨や風やに會つて散つて終ふ櫻が、今は青々とした葉をいつぱいにつけて、風に旋られた雨に吹き捲られてゐる。『櫻の青葉には殘の外毛蟲がたかるさうだが、武士に好まれた花も洗ひさらしてみれは、人の世の花と大した違ひもないものだ。』などゝ考へながら、彼は又、何時とはなしに眼をつぶつて、頭を後の硝子に押しつけるやうにして瞑想に耽つてゐた。

『……世紀末であるといふ事實は、誰しもが認めるであらうと確信する。世は渾沌と廢頽、權力の橫暴と支配者の貪慾、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かゝる時多少でも心あるものならば、何を豫期し、又何を渇望するものであるか。意氣地なくも宗教に逃げ、打巧に趨り安價な享樂や、臆病な懷疑……』

或る新聞に書いた、或る原稿の中の一節か、お前のは宣言ばかりであつたのかと呟いて來る。それかと思ふと、

『お前の名は』

『山本ゴロウです。』

『ゴロウのゴは數字の五か』

『國を護るとか、守護神とか書く時の護です。』

『馬鹿。』

つい先頃のこと、彼等が檢束されて留置場に押し込められた時、彼の隣りに、矢張り彼と同じやうな理由で引つぱられて來た元氣のいゝ若い勞働者、それと留置場係りの巡査との光景などが浮んで來たり、彼自身のその額のことなどが、山本護郎といふ若い男の思ひ出から引きずられて、何時とはなしに浮び出て來る。

『我々は、死や流刑や、貧困を餘りに恐れ過ぎてゐる。』

『……而も安住の場所は、彼のソロモンが頗る快しとしなかつたものである。かくて、ソロモンはその一切の光榮と、七百人の妻妾の中にゐて、尙且かう叫んだ。「自分は、生よりも遙かに死の幸福であることを知る。人間のうち、最も幸福なるものは、この世に生れて來なかつたものである。』

彼は、天井の高い、併して暗い留置場の中で、明治三十年位ゐから使はれてゐるらしいざら〳〵の毛布に包まれて、板敷きに木の枕といふ格好で、靜かに眼をつぶりながら、ロオランの作の中の言葉を考へてゐた。その時のことが、何時の間にかぬら〳〵と思ひ出の中に飛び出して來る。――狼共には訓練と整頓と、優越と併せて八十錢があつた。一圓五十錢があつた。二圓があつた。が、何うだ。羊共には訓練も、連絡も、八十錢も二圓もなかつた。あるものは、只饉じさ腹と哀れな意氣とだけである。――彼は不快と憂欝とで何となくむつとして來た。

『人々は、死や流刑や、貧困を餘りに恐れ過ぎてゐる』彼は再びかう思ひ返した。それから、又思ひ續ける。『人間がなあ動物として生きてゐられるなら、こんな呑氣で、又下らぬことはない。如何にして人間らしい人間として生きるかを考へるので、このとほり苦勞もするのだ。――さうだ。僕はYが何時かしらかう言つた時に、只一言さうとだ答へて、折柄握つてゐた盃で乾盃をしたことがある。僕等の前途は光だ。もう少し行けば光が待つてゐる。だが、光を浴びる爲めに開かねばならぬ重い扉だ。その扉は案外厚くて、重たいかも如れない。或ひはさうでないかも知れない。その扉の爲めに、僕等は死ぬるかも知れない。だと、死ゝいかも知れないとは、何うして樂觀出來やう。それかと言つて、暗いところに何時までも居られるものか。

彼は、彼自身の繪のことを思つた。彼は彼の繪に對して、近來益々油がのつてゐる。のみならず、より以上のいゝ繪が描き度いのだ。それから役目が未だある。『腕ばかり達者で、それに甘くて、自分達自身は超人ぶつた低能兒であることに氣のつかない、哀はれな職人達への警鐘を鳴らしてやらう。』そんな、誇大な考へも湧いて來る。

華山や、顯齋や、琴石、半香などを集めて、『繪を描く奥の手は、古人の模倣や、馬車馬式努力よりも、窮極は頭を作へるにある。人間をつくるにある。彼の董文敏の如き……』と、離別の盃を交しながら、畫家の心得を弟子達に話してゐる樣子が、何だか眼の前に描き出されたやうな氣がして來る。

だが、次の瞬間には、華山が處刑に會つて死んだことや、彼の兩親や兄姉達の死んだ時の光景が、いつしよくたになつて、ごちや／＼と思ひ出となつて現はれて來る。そのために、彼の藝術の中の文學の部分と、美術の部分と、光への運動と死、そんなものが巴となつて、彼の考へを掻き亂して終つた。

人間圖二夢裡一、　幽子歩二寒烟一、
千里無二友至一、　九天有二月憐一、
天高思更遠、　人困志愈堅、
塵世君休レ說、　氷輪有二缺圓一、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

華山が三岳の扇をとりて、むつつりしながら右の一首を書いたであらう様子を思ひ浮かべてゐるうちに、彼自身の幼少の頃に祖母が死んで、續いて姉が死んで、我鬼大將になつて隣近所の迷惑者になつてゐる頃に、祖父が佐世保の娘、彼からみれば叔母のところへ行つてゐる間に死んだこと、續いて父が四五年も病氣で寢て、結局は死んで終つたこと。——

それから當時二十七歲の兄が、任地の名古屋で病死した。十七歲であつた彼は、母と二人きりで國にゐたのであつたが兄の死が電報で知らして來た時、尤も助からぬだらうことは豫期されてはゐたが、いよ〳〵となつてみれば、途方に暮れた母が、佛壇と簞笥との間を、涙をぼろ〳〵滴しながら、狐つきとでも言ひたげに二度も三度も廻つてゐた光景。

最後には、彼が二十四歲の夏、正月からいよ〳〵不可なくて、彼も東京から呼び戾されて、病床につききりだつた母が痩せて蒼白い顏、その代りには達者な頃の勝氣な顏とは違つて、全く子供々々した表情で、

『愈々駄目だから、お先きに行きます。後はこれ一人だから宜敷く願ひますよ』

と、側の叔母達に、彼の方を眼で知らして言つて終ふと、それから十分も經たないうちに息を引きとつて終つた。

遠い近いの親類の人達の死に去つたことは論外で、彼は純粹の肉親のありたけに死なれた。その度毎に、人間の生死の問題に打ちつからねばならなかつた。生長するにつれて、死といふ目前の問題を、本統に考へるべく餘儀なくされて終つた。——『死んで終つたものの幸福よ』、彼は、彼の生きゐる事實から割り出して、から呼ぶべく餘儀なくされた。

それであるのに何うだ。異國の人々をも、あらゆる國の人々をも暗くして終つた黑雲、それはもう、綿のやうにふは〳〵したものではなくつて、堅い扉の形をしてゐる。併も鐵の扉だ。彼等は、その扉の背後に光のあることを知つた。世界中の人々を照す光のあることを知つた。扉と死と、——矢張り生き度い。幸福に、一人前に生き度い考へが、浮き沈み何處かの隅の方からちよい〳〵と顏を出して來るではないか。そればかりでなく、繪筆の方でも、繪具の方でも、カンバスの方でも、『一體、俺達の方は何うしてくれる積りだい』と、呟くやうに抗議を申し入れて來る。

彼の心には、憂鬱と不機嫌と、硝壜が投げつけられて割れる音、燃えつゝある象牙の塔、ピンク色の旗、自動車、喊聲銀色に鋭く光る或種の金屬、俳優と逃げ出すお洒落の人妻、々々々々々々……………、暗と光の交叉點、そんなものが頭の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中に渦巻のやうに、歸去來する。

二

電車が牛込驛まで走り着いた時、數人の男女が周章しく車內へ這入り込んで來た。

彼はその物音で、つぶつてゐた眼を瞪いて、上半身も前の方へ直して、直ぐ反對側に腰を下した女を見た。子供を背負つた、四十に近いらしい、それにコートがないので身體の下の半分位ゐは、びつしよりと雨に濡れてゐた。今度は、子供を背中から下すと乳房をあてがつておいて、始めこ悠り車內を見廻はし出した。

彼も、もう瞑想に耽ることは止して、新來のその女の方を見たり、他の人達を見たりしてゐたが、何氣なく彼の眼に止つたのは、女の洋傘から流れる雨滴であつた。雨滴は洋傘から、そろ〳〵と流れ始めた。そして、乘りてがなくつて、雨の目としては珍らしく乾いてゐる床板の上に、小さな地圖のやうなものを描き始めた。車內の掃除が餘りよく出來てゐないと見えて、白い塵埃が一面に薄い層をなして敷かれてゐた。雨滴はそれをぢく〳〵と浸しながら、自分達の面積を廣げて行つた。

立派な本土が出來ると、今度は三四の半島が出來始めた。ごと〳〵と音をたてゝ電車が走るにつれ、その都度車體が搖れるにつれ、半島は少しづゝ岬を突き出して行つた。不思議なことには、橫の方へ多く突き出して行つた。後の方へは、橫の割合にしては、半島がなか〳〵突き出さなかつた。少しばかり出たかと思ふと、板と板との繼ぎ目の凹んだところで止まつて、それから後方へは何うしても突き出さなかつた。ところが、前方へは、橫よりも、否それどころか後方よりも尙岬が出なかつた。それは遲々として、他の方と比較したならば、全くお話にもならぬくらゐの突出しかたであつた。

飯田町驛で電車が止つた。と、今度は雨滴の岬、のみならず本土まで一氣に前の方へ進行し始めた。それは、橫へ突出た岬の比較ではなく、つる〳〵とのめり出して、一尺近くも前進した。こんな理論や、實驗やは彼も知らないことはなかつた。が、それを日常の出來ごと、自然界の出來ごと、殊に雨滴の場合に注意して見たのは、彼にしては今が最初であ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた。

『自然界の現象は、總べてかうしたものだらう。人間界の現象だつて同じことさ。』

彼は段々興味を持ち始めた。そして、かう心の何處かで呟くと、又その雨滴の方へ注意し始めた。

警笛が『プー』と一つ大きく鳴つた。電車は飯田町驛を出た。前方へ突出した岬から、そろ〳〵と雨滴が本土の方へ戻つて來ると、又岬を横の方や、後の方へ開拓することを始めた。ごと〳〵と電車が進むにつれて、雨滴は本土は塵埃を浸して行つた。岬が少しづゝ延び始めた。が、それは矢張り牛込から飯田町までの間見たものと、結局は大差ないものであつた。間もなく、電車は水道橋驛で止つた。

と、今度は前とは倍位ゐも前の方へ、本土には少しの雨滴を殘したまゝで、勢ひ込んでのめり出した。それは、全く一瞬時の出來ごとであつた。する〳〵と前進した岬の突角は、途中の大溝渠、――板と板との凹んだ繼目である。――それを突破して、最初の位置からは二尺五寸も、三尺ほども前の方へのめり出して終つた。

『面白い。なか〳〵面白い。』

彼は、今度はかう心のうちで叫んだ。多少晴れ〳〵した氣持になつたやうであつた。が、その次の瞬間には、もうそんなことから氣を奪はれて、自分の洋傘の心配をしなければならないのであつた。『面白い。なか〳〵面白い』と叫ぶ瞬間、彼は前の方へ突き出して、それに凭れかゝるやうにしてゐた洋傘を、力を籠めて押しつけたものらしかつた。その爲めに買つてから三年、それで安物の木の柄でもう可なりにひん曲つてゐたものだから、洋傘の柄は理由なく中程から折れて終つた。彼は洋傘を少し開いて、柄の樣子を詞察した。が、それは行き倒れか何かのやうに、ペン〳〵になつてゐて、そのまゝでは再び使へさうにもなかつた。

『失敗々々。夢遊病者の失敗、………………』

彼は苦笑するの外はなかつた。仕方なしに洋傘を以前のやうにしめて、眞直に立てゝから、二三度横に振つてみた。金具の音ががちや〳〵と不機嫌な音を立てたきりで、別に善くなりさうにもなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三

彼はお茶の水驛で下車せねばならなかつた。プラットホームから、改札口へ行つた頃は、風が強くなつてゐて、雨は切りにその風の爲めにおだてられてゐた。交番の上を翳した木の枝が、手玉にとられたかのやうに、ふら〳〵と橋の方へ向いてなびいた。その都度、若葉の裏が見えて面白く光つた。

岀面は地面で、強い雨足の一條毎に泥の小さな一塊が挑ね上つた。ど、ど、ど、……といふやうな地響きがする。外を歩いてゐるものは誰もゐない。唯電車が一臺、橋を渡つて駿河臺の方へ走つたばかりだ。

彼は小降りになるまでと思つて、そんな景色を眺めながら暫らく立つてゐた。が、それは無駄であつた。雨は段々強くなりさうだつた。風の方もさうらしかつた。やがて、思ひ切つて洋傘を廣げて橋の方へ歩き出した。雨の一ぐんが、斜めに彼の身體へ突入して來る。二ぐん、三ぐん、——靴は勿論のこと、ズボンも外套も、直ぐぢく〳〵と濡らして終つた。のみならず、橋の三分の一も走つた頃には、もう彼は彼自身の洋傘を持てあまして終つた。洋傘の柄の下半部は勿論役に立たなかつた。仕方なしに折れない方の部分を握つてゐると、頭にさし閊へたり、先が見えなかつたりして走れなかつた。おまけに、川下から長蛇のやうに蜿りをつくつて襲撃して來る、勢の強い雨は、彼の傘を何の役にも立たせなかつた左手の方へ奪ひ去らうとさへした。彼は思ひ切つて、洋傘を疊んだ。それを脇の間へ抱へると、右手で帽子を押へた。それから、今度は反撥的に、

『一、二、三、……一、二、三……』

と、氣合ひをかけて、全身びしよ濡れになりながら順天堂病院の方へ、ひた走りに走つた。——十一、六、四、——

世界欄

エス・エル黨公判に對するルナチャルスキイの論告

——革命期に於けるプチブルジョアの役割——

一、プチ・ブルジョア黨の消長

われらの師マルクスとエンゲルスはすでに五十年以前に、革命期に於けるプチ・ブルジョア諸グループの役割を豫見してゐるが、ロシアに於ける社會革命黨（エス・エル）の行動は確かにその先見を證明してゐるといはねばならない。

エス・エル黨はそのプチ ブルジョアの政黨の一つに過ぎないのである。惟ふに、プチ、ブルジョアの諸黨の歴史的役割には二つの回轉期がある。第一期はプロレタリアが、未だ組織せられず、階級意識に乏ぼしく、從つてプロレタリアそれ自身の運動といふものが出來ない。その時に當つてプチ・ブルジョアの革命黨が專ら指導者の役割を演ずる。そして、そこにはあらゆる異分子が入り混つてゐるのである。その時、左傾分子はプロレタリアにまた、右傾分子はブルジョアと接觸する。この革命鬪爭前期に於けるプチ・ブルジョア黨はプロレタリアと大衆の支持を受けるのではあるが、その社會的役割は比較的ポシティブなものである。

だが、その後プロレタリア自身が階級意識に醒さめ、それが革命の實際勢力となるに及びプロレタリア自らは活動の中心的立場におかれるのである。その時に當つて、プチ・ブルジョア運動の障害となる。プロレタリアとは思想に於て、また、感情に於て、全然その立場を異にしてゐる。プチ・ブルジョア黨は必然的に社會革命の進路をさまたげる。そして、革命黨は果然反革命黨となる。エス・エル黨の經路この事實を明かにしてゐるのである。

二、「民衆か」階級か

プチ・ジョア黨の變體であるエス・エル黨は階級鬪爭を理解しやうともせず、從つて是認しやうなどとは夢にもしない、エス・エル黨は「階級」といふ最も明確な理論に對して極めて空漠な「民衆」もしくは「國民」といふ用語を認ひる。かつてラトネールは國民のためには社會主義を捨てても關はゐと廣言してゐるが、エス・エル黨員にとつて、國家の利害此ために は敢て勞働階級を犧牲にしてもいいといふのである。しかし 階級鬪爭の時代に於て、そう揚言した彼等の態度はどうであつたらうか彼等の眼中には階級鬪爭といふ信念は更にないのである。そして、「壓政者に對する民衆の對抗」とは常に彼らの理想で、三月革命に於けるエス・エル黨のタクチックも、また常にソヴイエットに對するタクチックもすべてそれから一歩も出てゐない。が、しからば彼等のいふ民衆とは何ぞや。われから見れば今のところ「民衆」は存在してゐない「の」である。「階級」があるのみではないか。エス・エル黨のタクチックは常に空漠の中を泳いでゐる。だか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら常に實際と空間の間を迷つてゐるのだマルクスとエンゲルスの豫言は眞にその通りである。

三、テロリズムへ

階級闘爭は内亂と化す。内亂の初期に於て二つの對抗した敵味方は實勢力を必要とするところが、その際もしも、一つがその實勢力を失つた時、必然的にあらゆる手段に依らなければならなくなる。實勢力を失つた反革命者は遂にテロリズムの行爲に出るのである。白色恐怖はそれである。

そこで、勝利を獲たプロレタリアはそれに對抗するため、他の恐怖をもつてこれに備へなければならなくなる。革命裁判所は反動者に備ふるところの「階級」の武器であらねばならぬ。

四、エス・エ黨と彼等の主張する社會主義の價値

エス・エル黨は資本主義戰爭に參加し、世界のプロレタリアを分裂せしめたといふ見地から、また、ヴエルサイユ條約その他一切の帝國主義條約を認容したといふ點で第二インターナショナルと分離したことを聲明してゐるのにも不拘「二百万の主義者を代表する」といふ第二インターナショナルの頭目アンデルヴエルドに甘じて辯護されてゐる根生はまたどうしたものか。エス・エル黨員にはそれが「精神を失つた一プロレテール」の辯護でないといふのか。

五、聯合國へ奉仕

エス・エル黨員は「愛國主義」の名に於て、聯合國に奉仕したのだといふ。われらは定めし聯合國の補助金は莫大なものであつたらうと思つたところ、こん度の公判は事實それ程でなかつたことを示してゐるが、それは、聯合國はエス・エル黨に金を餘計くれなかつたといふまでのことで、資金を受取つた點に於て價格の如何を問はずエス・エル黨員は清淨の身でない。エス・エル黨の不用意であつたことは、そうした態度は聯合國の帝國主義の働きになつてといふことを無視したことである。

六、哀れプチ・ブルジョア黨の末路

エス・エル黨は今ではソヴイエット政權を轉覆する愛志がないといふ。しかし、飽までソヴイエット・ロシアと闘爭をつづけることを聲明してゐる。だから、今後とも、エス・エル黨は未だ茅生中であるソヴイエットの制度、經濟組織に對して間斷なき障害を試みるだらうエス・エル黨はソヴイエット・ロシアのあらゆる弱點をつけねらつて、これに防害を企るだらう。よし、エス・エル黨の行爲が以前から見れば極限されるものにもせよ、それが、反動の勢力であることを見逃されない。エス・エル黨はアンチ・プロレタリアンであるプチ・ブルジョア黨である。この黨が死滅することは自ら酬ゆられた運命である。

註、種蒔き社のエス、エル黨に對する態度は明瞭である。不平僕らの言論は日本官憲の忌諱に觸れ發賣禁止になつたが、前號世界欄にはエス・エル黨の罪狀のについて少し許り書いておいてある。尚ほ來月號にはマキシム・ゴーリキの意見とそれに對するカール・ラデックの論駁を載せる豫定である。

◇

「農民運動」の發刊――虐げられつゝある全農民のために、正義と眞理を絶叫する機關誌として發刊せられた。同誌は單に農民の爲めのみならず、あらゆる無産階級に取つての强い味方である。

◇

「無産青年」の發刊――新進氣鋭なる無産青年の手によつて近く發行の豫定雑誌である。今から奮闘を期待してゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方欄

秋田市に於ける新人の叫び

秋田市　T　生

暑いさかりの八月十七日の夜は、私たちが待ちに待つた新人の新劇試演と文藝講演會があるといふので、私たちは血を躍らせて紀念會館にむかつた。此の日の午後のこと起つた私は好奇心から、紀念會館のなかをそれとなく覗いた。すると、秋田文藝協會の主催とのふれこみであるのに、港の青年が二十人ばかり、皆嬉々として舞臺裝置のために汗みどろになつて働いてゐた。秋田市の青年が一人も交つてゐないのは私をして異樣な感に打たれさせた、猶まだ私の驚異であつたのは、顏の見覺えある洋文君や、賢三君等がみんなといつしよになつて立働いてゐたばかりでなくブルジョアの息子も、學生も、純勞働者も皆何かの手足となつて働いてゐるかのやうに、實に兄弟のやうにうごいてゐたことだつた。私はうらやましく感じた。これでこそ、港の青年だと思つた。此の團結がひとりでに出來てゐるから秋田縣の文化の先驅となつて活動するのだと思つた。秋田市の青年には、かうした差別を撤つして一團となつて活動することなと、今後は知らず、思ひも及ばないことであると思つた。猶また私は『文藝協會の主催』ではなくて、實質上、港の青年の主催であり、種蒔き社の主催であることがわかつた扨て私はその夜の雜感に移らう。

開會午後七時半頃、外は薄暗がすつかりはびこつた時、館内では開會第一に、今野賢三君が演壇に立つた。『青年と文藝』君は自分が青年であるから、自分の文藝に自己を捧げた道程を語ることは、青年と文藝を語るものであるといふ前に提から傳統破壞のための闘争精神をハッキリ私たちの胸に植えつけた。完全感情の飛躍に人生の最高意義を見出して、現實との闘爭まで進んだ思想過程には、一寸うかゞひ知ることの出來ない哲學的、思想的を深みの裏付けられてゐるを知つた。

佐々木孝丸君の『世界主義とエスペランド』は、理解し得ない聽衆も少くなかつたらしい。

どつかゴーリキーに似た相貌の季丸君が、案外おとなしい口調と態度で、世界無產階級の團結には、世界論たるエスペランドが必要であると說くあたり、君が獨自の壇上だと思つた。エスペランドと無產階級と結びつけて說くのを他人にきかないからである。

土崎の生れで、秋田市などにはあまり的られず、皮肉にも中央には大に名を走せた小牧近江君が、バルビユスとロマンローランに就て開口一番、エスペランドに世界主義あり、文藝に階級あり、その藝術にトンタナショナルがなければはないと喝破して、ローランと比較してバルビユースの思想發達の過程を說く、『簡單〳〵』といふ聲がかゝつた時、小牧君グツと睨んで秋田署の某刑事、自分の講演に共鳴してくれたことを感謝し、自分の言草の眞理であることを證明してくれたと讀んだ。その睨みの凄かつたこと、戰慄に價ひした。その夜、某刑事なるもの、寢ざめが惡かつたこ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とだらう。洋文君の名、文壇の新進作家として私たちに印象深い。ナンセン博士の手記を左手にかざして、ロシア飢饉の實狀を叫ぶうち、漸次にその顏は紅潮を呈し、その眼の輝きは鋭さを加へ、熱烈の語調は、一語より一語へと燃えてゆき、止まるところを知らなかつた。如何に冷酷な人でも、あの熱烈さに、心臓をえぐられないものがあつたであらうか。果せるかな、休憩時間に、美人がリーフレツトを賣るにまわると、たちまちにして賣切れとなつてしまつたではないか。飢饉の宣傳、すなはち、深刻な改造の宣傳をしてくれた洋文君に感謝する。

藤森成吉先生の名を聽くや久し、秋田雨雀先生の名を聽くよりもより以上久し。藤森先生の『ある牧師との會話』『若き日の惱みを讀んだ印象を思ひ浮べて、はじめ微笑のうちに、聽いてゐた私も、バクニンの名が飛び出してきた時はすつかり眞劍になつてしまつた。今まで『學者は革命などには緣遠いものと思つてゐたが藤森先生は甚大な影響を私たちにあたへてくれた。しんがりとして秋田雨雀先生が演壇に立つた。兩頰にたへず微笑を含みながらまつたく講義をされるやうに、新しい芝居とその意義を、明細に私共の胸に植えた。私たちは、すつかりいゝ氣持になつて、先生の一語〳〵一擧一動に魅せられた。私はその相貌を眼のあたりに　、その講演をきくに及んではじめて、先生の作品を讀みたくなつたことを告白しておく。

最後の新劇『ある日の一休』孝丸の一休、洋文の野武士、賢三の寺男、それ〴〵はまり役らしかつた。舞臺の簡單なのも、新劇として眞面目さを示すに役立つたかも知れない。三人は樂々と演出した。孝丸に少しなだやりなところがあり、賢三は少しくこまかくこどきすぎ、洋文は少し突込みが弱かつたといふやうなわづかな缺點をのぞけば、とにかく黑人らしい成功を見せた。秋田人はまつたく奇異な感に打たれたらう。新壇はこんなものかなと――。藝者が、ロシヤ飢饉救濟の應援として此の講演會に出たといふことに就て、藝者そのものなるが故に比難する人もあるが、私はそんな小さな了簡評したくない。藝者とても、虐げられてる人間のうちだ。そしてロシヤに對して、眞面目な同情から應援に出たものであるとしたなら、何故藝者なるが故に批難しなければならないのか。階級に眼醒めたもの〻大衆運動には、誰でも參加し得る權利がある。

小牧、洋文、賢三、港の出身の三君が期せずして同時に演壇に立つ事。私は三君各自の將來を非常な眞面目な興味と期待を持つてながい眼で見てゐようと思ふ。（九、一）

荒川村通信（秋田縣仙北郡）

村の同人三人は、ブルジョア根性と奴隷根性撲滅の第一歩として九月五日に小學校長その他の人達の好意によつて、小學校に勇敢に第一回の新しい講演會を開きました。秋田勞農社の畠山松治郎氏と種蒔き社の金子洋文氏が來てくれました。今野賢三氏が急に歸京されて駄目だつたことが殘念でした。

この日は恰度舊暦の盆の十五日の休日だつたので、曇りが晴れた午後の陽を浴びながら百餘名の聽衆が集りました。百餘名！大きな所から見だなら、それは不足な人數であらうしかし、この山間の村に於いては、殊に三十軒二十軒十軒五軒と散在してゐる村に於いては、たしかに注目に價する多數であつたのです。

村には今まで、ブルジョア達及びブルジョ的官僚の走狗にすぎない青年團で催した所謂人を馬鹿にしたやうな通俗講演會なるものがたくさんにあつたのです。聽衆は團の總會にひつぱり出されたために仕方なしに聞かせられる羽目に落ち入つてゐたらしいのでした。だが最後の講演會には――それから今までなかつたので――敎育點呼にくつつけて相かはらずに未成年者を引きとめやうとした相ですが、實際に聞いたのは十數人足らずそれも團

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な幹部や軍ばつの奴隷どもであつたと云ふ、發起者としても講讀者としてもすこぶる面白くない場面を現出した相でした。しかも縣の社界主事とか何とかの有難い名儀を持つた人間の話は振つたものだつた相です。

…………………………………………………………

…………………………………………………………

とか云つた相です……。

今度の會は村としては空前の盛會と云つてもいい。事實またすばらしい盛會でありました。老人達よりも若い人達が殆ど全部を占めてゐたと云ふこともたた、村の內部がおぼろげながらもうでぎを持つてゐることを證明してゐると思ひました。たとへそれは大多分好氣心からとは云へ――。

魂から迸る叫びは魂へとひゞく。眞に泣く者は相手を泣かしめるものだ。

どうだらう、講演中はすべてが緊張した潑溂たる氣分に滿ちてゐたのです。拍手が鳴りひゞえ…………………そに氣分に、人々の若い感激が籠つてゐることを感じました――少し村を賞めすぎるかも知れません。しかしそれは全くいい氣持のものでした――前衞、種蒔く人及びその號外ナンセン會見記などが非常な勢で賣り切れたのでもその時の氣分が想像出來ると思ひます。

第一歩はたとへ少數の者だけにせよ明らかに踏みはじめられたことと思ひます。舊い罪惡の荒川が滅んで、新しい曙が村を訪れることも、これからだと思ひます。一切の在來のものにあき足らなかつた人々は、この會によつていかに刺戟されたか、これからの反應を期待して見るべきです。

仕事はこれからです。同志が生れ出るでありませう。

村の同志は、雜誌その他の賣高に特志者の寄附を加へて全部直ちに勞農ロシアへ寄附しました。

種は蒔かれました。五六軒しかない山中の村へまで蒔かれたのです。全くいい事をしました。一時はかぶれて浮き出すでせう。やがて沈靜になるでせう。それから本當のものがにぢみ出て來るでせう。同志が生れ出て來るでせう。それをじつと見守つて期待してゐます

翌翌日でした。警官が來て、本署の命令だと云つて種蒔く人の號外の殘部を同志から押收して行きました。

彼らがそんなことをすればする程
彼らの正體が
あきらかになることを
彼らは知らない……。
もう、誰も彼らを
怖れはしない……。

一九二二、九、七

能代の文藝講演會

石　岡　生

寸申上ます。能代は小牧君が來なかつたのは殘念です。代藤留吉君といふのがロシア飢饉に就て統計を示して語り、今野賢三氏が民衆藝術に就て、種蒔き社のために、萬丈の氣を吐きました。氏は映畫說明者として在住し、人間覺醒のために人知れず種を蒔いた、氏にとつては第二の故鄕ですから感慨深いことだつたでせう。洋文氏は無產者の戀愛に就て藤森成吉氏は、白蓮問題からある牧師との會話、秋田雨雀氏は戀愛の三角關係に就て、涼風を袂に入れるやうな話でしたが、皆、期せずしてソビエツトロシアを例に引きました。リフレットを賣つて飢饉の寄附をあつめたがたちまちリフレツトは賣切れました。聽衆は青年の大多數を占め、女子之部ばかり交つて二百を越した、氣持のよい講演會でした。

八、十八日その夜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聳人

隣室の肺患者

勝手二四郎

七月の太陽が桃山に燃へ
窓先に戯るる小犬に日が暮れそめると
青い女は思ひにふける。

私は。。
彼女のせきは過去の生活を見る。

汚された太陽とよどんだ空氣
これが中に蟠居する鐵(くろがね)の怪物
そが野獸叻吼と眞黒の吐息
あわれこれを操るどんらんの吸血鬼は
やさじき小羊を餌に集む。

彼女の纖な四肢は細り
ブルジョアのダイヤに輝き
頰のばら色は咯血にあせ
望を失つた瞳は虚に焦點を結ぶ
それでも私が前をすぎる時
瞳になほ人のなづかしみを見せる。

ああ、そのとき
私の火山は爆發し
正義の焔はちたりをそむる。

自由の天地よ

深谷赤人

おゝ大工よ
汝の造つた別莊は誰のもの
汝はなぜそこに住まないのだ
おゝ漁夫よ
汝のとつた魚は誰のもの
なぜ汝は食はないのだ
おゝ小作農業者よ
汝の作つた米は誰のもの
汝はなぜそれを食はないのだ
おゝ女工よ
汝の織つた絹物は誰のもの
汝はだぜそれを着ないのだ
おゝ職工よ
汝の製造した自動車は誰のもの
汝はなぜそれに乘らないのだ
おゝ月給取(サラリメンス)りよ
汝の會社の利益は誰のもの
汝はなぜそれを分けないのだ
おゝ兵士よ
汝は誰の爲に戰ふのだ
汝はなぜ…………
あゝ勞働者よ醒め
起を
進め
〇〇の鐘は鳴つてゐる
自由の天地は近づいた。

イヒヒ節し

黑田蓮太郎

俺の顔へ他人の顔笑へ
世の中笑へ一緒に笑へ
學問が何んだ學者が何んだ
偉らさうにするな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

悲劇は喜劇世の中喜劇
舞臺で笑へ一緒で笑へ
社會主義宜からう
牢屋の中で四分六喰つて
暮らすも宜からう
お金がほしい欲しけらゃ儲す儲け
さへしたら女も酒も
好きなやうに出來る
そしたら酒や女と笑へ
好きな程笑へ
毎日エッコラサ稼せいでも金が
稼せいでも出けんなら笑へ
イヒヽヒと笑へ
好きなだけ笑へ
狂人の樣に世の中笑へ
何にも糞もいらへんけんど
生きだけ生きる
死ぬ迄生きる
お金がのうてお腹が減つて
殺らや皆で笑ふなら笑へ
貴樣等の口がアハ――と笑へらや
俺の口はイヒヽヽと笑ふ
それで俺の芝居はしまひ
人間共アバヨ！世の中アバヨ！

タンカラめぐり　MY生

今日は休日だ否休みにしたん俺公だ自が

四年ぶりにぶらついて見る實現を
オヤ〱以外に變らずまだ奴サンが居る
大きなカシの棒を持つて人の顔をじろ〱と
吾れこそは當坑山主の番犬なるぞ
チイサトドロボウをすると
此の棒を御見舞申すどとばかり

ガタン、ドチャン、バリ〱
オツ、ビックリした瓦斯山から瓦斯車の早お
り
キケン〱命ち有つての物種だ三十六計

何處からも濁つた女の聲で
高い棧橋に手をついて
カンリヤウ〱と叫ぶ聲は
さてもやさしき樣の聲
人目なけらニャとんで行く
オヽ！此の苦しさを歌で濁す
あはれな老若呻吟の聲だ

彼方に光明の怪物が居る
アイツだ〱俺の一人の弟を食やがつたのは
彼奴の影に何か居るチリシから今に見ろ

オヤ最う午後四時か坑夫のクリコミ時だ
續々弱り切つた老坑夫、少年坑夫、女坑夫と
此の世の地獄と云はる

數千尺の地抵へ〱とスイコマレてしまう
かすかに聞ゆ少年坑夫の歌ふ聲
　七ツ八ツからカンテラさげて
　坑内さがるもさホイサ親のばち
と次第〱に消へて行くチラリ〱と見へる
二ツ三ツのカンテラの灯慘の奥の慘か詩の奥の詩的か？このあはれな少年坑夫等がたすかるのは何時だろう？早く〇〇〇〇でも實現せねばとしも。
ア、くたぶれた見るもの聞くものいつも昔しの如く俺の心は反抗心を起させないものはない。

「オイ久しぶりだどうしちよるか何か金もうけはないか」と俺のかたを打つ奴が居るふり反つて見ると俺と仲よしであつた虎公だ。
「オ、虎公かつまらないどこへ行つても」
「ウンさうか久しぶりだ一ぱいやろう何！金がない外人行儀な事云ふな俺が知つちよる」
虎公は俺を引つぱり一軒の飲食店により
「オイバアサン燒酎二合半くれ」彼が一口俺が一口と思はず五合の燒酎に酔つてしまつたいゝ氣持ちになつて其の家を飛び出した
俺の顔も心も血も眞赤だが
外は眞闇、アツ石につまづいた
世界がヒクリかへり出した
ウ、、俺はもうどうなつてもいゝ俺は此處に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寝る
何が來て俺の顔にキッスする

私は燃へてる

A　K子

私心が燃いてるわ
毎日新聞讀みまして
○○家達の横暴を
見てる度毎燃へ立つは

今は無産者の税金を
スボルよいたけてスボリ取り
増々○○家反抗心を
増させるばかりは
面黒いわ　。

私等らつ迄○○家の
ドレイとなつて
ムツウツされて居すまの
今に見てれや必ず

オウ同胞よ
少しの間我慢してよ。

ブルジョアの種蒔き社

中島　弘三

種蒔き社も恐ろしくブルジョワ化したものだ「生ける武者路實篤」の廣告文はなんだ。武者が「世界の人」で、そして彼を「解剖し批判することは」同時に「日本及世界の思想藝術を鮮明する」ことだとは、餘りに無貞節だ。こんな廣告文を書くのは、ブルジョアの雜誌社だ、もう少しあつさりと商賣氣を無くして書いたらどうだ、我が愛する種蒔社の爲めに惜しむ。失禮

改　税

K　Y生

税金が今度各地で改正されましたのは皆さんが御存じの事だらうと思ひます。俺村でも議員や委員が役場で御酒を呑み乍ら作つたのがこれです。

近所で一流の資產家(勿論村では一番)Kでは先年より三百圓も減つたそうです、それで子供も多く良い學校に入れる事の出來たそうです、俺家の近所の大工さんは先年より十二倍ばかり多くなつだそうです。それで家計に非常に困つて役場へ行たら少しも相手にしてくれぬさうです、私は月給二十五圓を取つて居ますがそれにも一人前として相當附果されたので每月一回刈る髪も刈る事が出來ない樣な解けです、それ故二十才になつても父母へ恩を返し出來ないのです。父　はこれ迄小作をして居ましたが今度俵米の改正と製米の改正でとても年寄りは不可能だといふので自主樣へ返さうとして居るがなかなか聞き入りません、年中過ふに食われぬ大工や小作人は高税をとはれ、何十人の息子を思ふ存分金を使わしてる自主樣達が底税したのは何の平等でせうか。自主樣達は每日村役場へ來て御酒を呑んで居る金が多くとられるから減税したのですか、私はどうしても此の度の税制は面白くありまそん。俺村へ今度石油が出るさうですそれ故小作人は漸く目醒めて來ました。石油が出ると田を返さうなんての相談です、今に見て居ろ俺が此の銅の腕にて……。

莫迦なブロジョアー

S　M　生

無自覺なブルか
汝は汝の中のより亡び
憐なるブルよ汝自からは滅亡はまぬかれぬまい
汝のネエルギーしたるプロは一時も早く自由に開放に
汝のパンは汝自から手中ある事を悟れ
憐な馬鹿の汝よ　一時も早く覺醒せよ
俺達兄弟は汝の知解ない苦業を慈の樣に默し耐へて行く
ぞモオタアは唸る旋盤は廻るハンマーを喧しく打つ

秋田青年思想研究會の創立

八月中旬種蒔き社同人が秋田縣下を一巡して以來、縣内は素晴らしく活氣づいた。同人諸氏の骨折りは立派に縣民の刺戟となり得たのだ。それはうつけ者を自覺させ心ある者をして奮起せしめるに十分だつた。尠くともあの講演を聽いた者の大部分は、大なり少なり同感せぬものがなかつたやうだ。それ丈でも已に成功であつたと云へる

種蒔き社同人來秋とほゞ相前後して表題の如き、秋田青年思想研究會なるものが當地に出來たことを全國の同志諸君にお知らせしたい。本會の創立總會は八月二十五日土崎に於て開催された。當時はヒドい暑さであつたが、そして、盛り農繁期であるためや又特別な事情のため不參を餘儀なくされた者もあつたが兎に角、各地を代表した出席者は約二十名に及び、各自緊張裡に重要事項を議し、出席者全部の贊成を以て會の綱領、規約、申合せ等を定めた。

全國の自覺した若い人達の中には、本當に眞摯に、社會思想を研究し、一歩々々と確信の上に行動したいとよき時機を俟つてゐる人々が、キット多く居るに相違ないと思ふ。さうして其等の人々が、心を合せて我々と一緒になつて呉れたならば、向後研究するにも行爲するにもはた目的を促進しこれを達成するにも、何んなにかお互に同一の目的に向つて進むものに取つて、大きな力となり得る事であらうぞ！團結は力である。我々は先づ何よりも全國的に團結することを第一としなくてはならぬ。今や全國的な運動を發始すべき時代であるのだ。

で、此の際若し、かねて本會のやうな結合の出來ることを俟ち望んで居つた人々は奮つて我々に加はつて貰ひたい。そして我々はまた各地にこの種の結合の生れることを切望し且つ期待するものである。

本會の主義主張並びに態度等をくどくどと述べる代りに、綱領と規約とを左に掲げる(但し、申合せは會員丈のもの故こゝでは發表せぬ。)

綱　領

一、我等は人間による人間の搾取の上に立つブルジョア文化を否定し、無產階級の徹底的解放による新たなる社會生活の實現を期す。

二、我等は理論と實際との考究により、此の目標に達すべき歷史的道程と方法とを明かにすることを期す。

三、我等は此の歷史的道程と方法とを大衆に闡明し、大衆と共に解放の闘ひに進まんことを期す。

規　約

第一、本會を秋田青年思想研究會と名づけ事務所を土崎港將軍野ふくべ川に置く。

第二、本會の綱領を承認し、熱心に本會の事業に參與するものは會員の紹介によつて入會することが出來る。

第三、本會の綱領に反し、會員たる熱心と誠實とを欠くものは總會の決議によつて除名することが出來る。

第四、會員は毎月二十錢の會費を負擔す。

第五、本會は毎年二回總會を開き必要の場合には幹事は臨時總會を召集する。

第六、總會は本會の一般方針と其の他の重要事項を定め、幹事を選任し、次回の總會開催地を定める。

第七、總會の決議に基き本會の事務に當る幹事は一名とし定期總會ごとに改選する。

第八、總會の決議は出席者の過半數の同意によつて成立する。但し、規約の改正及び會員の除名は二分の二の同意を必要とする。

以上によつて本會の色彩は明かなわけである。同時に我々は今後如何に動いて行くかは今更ら云はなくとも分つてゐる事がらであると思ふ。

全國の若き同志諸君！　我々は唯、諸君が本會の趣旨に必ず贊成し尙進んで我々と倶に此の無產階級解放の闘ひに參加するであらうことを固く信ずる。(一九二二、八月

社會主義講座

——十八世紀に於ける社會主義（モレリー）——

社會主義思想は決して生活から分離してゐるものではない。吾々の科學的方法に從へば、觀念は事實の産物でありその中に吾々が生活してゐる社會的歷史的環境の産物である。從つて社會主義思想は一の獨斷論(ドグマ)として諸君に無理强ひするのではなく、立派な理論として正當に理解されるべきものである。それがためには少くとも、人類の歷史的發展に關する一般的觀念を知らなければならない。

此の短い研究では勿論予は事件史も思想史も述べる餘地を持たない。然し、吾々の社會主義思想が密接に關係してゐる、ある指導的思想、又は支配的事實がある。それに依つて吾々は歷史を分つて、三大時代とする。

一、奴隷制時代。この時代では人間は獨立してゐず、只その主人の爲にのみ生きてゐた。古代には、大多數の人間は、主人に附屬する物品であつて、主人は勝手に、それこそ生かさうと殺さうと氣儘に處理出來た。

二、農奴制時代。この時代では、人間は半分獨立してゐて、半分は奴隷であつた。農奴は自分自身のため働いてはゐたが、然し、自分のために働く事が許可されるためには貴族や領主のために働かねばならなかつた。

三、現代。吾々はこの第三番目の社會的時代を次の如く分析する。即はち、賃銀制時代であり、「自由」勞働の時代である。この「自由」勞働とは、獨立してゐて、賣られはしないけれど、生活するためにその勞働力と勞働時間とを賣らなければならない勞働を言ふ。それは「自由」だ、然しその勞働力と勞働時間は、勞働日の範圍內では、自分のものでない。

歷史といふのは、王とか皇帝とか、所謂偉人とか、或は將軍元帥とかの生涯の逸話を集めたものではない。歷史は決して虐殺とか戰爭とかのお話ではない。歷史は、何より先づ、人類が生活手段を獲得した社會的條件の發展である

然し、社會的歷史、即はち人類生活の三大時代の歷史の外に、尙思想の歷史がある。思想史を理解するに當つては

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三つの考へ方があるのを知らねばならない。

一、獨斷的方法。これは、信仰の上に立つてゐるものである。カトリック教會の一人の大教父、聖オーガスチンは「妄誕なるが故に信ず。」と言つたが、これは即はち獨斷的方法の基本である。一の事柄が不合理であり、理性に依つて證明せられないが故に、信仰が必要となつて來る。信仰は理性の終る所で初まる。無數の獨斷的教義が十數世紀の間、否今日に至るまで多數の人間を支配して來た。それ故に吾々は近世社會主義の科學的方法で以て説明せねばならないのだ。

二、合理的方法。これは推理に基づき、純粋論理に基づく。それは一歩先へ出たものだ。人間は推理を初めた。最早、これこれの僧侶やこれこれの使徒を言葉だけで信じなくなつた。その斷定や思想は何故さうであるかを知らんと欲した。斷定するためには、戰鬪的議論を欲した。然し、これも眞の方法ではない。圖書館に行くと、純粋論理、空論で充滿してゐる。人これを呼んで、形而上學、抽象哲學純粋哲學の時代となした。諸君が例へば、戰爭平和人類の平等などのことについて誰かと議論をしても、多くの理論は聞くことが出來るかもしれないが、事實に就いては何ら知るところがないだらう。大抵の演説家などは、喉さへつゞけば、終日でも論理的推理を饒舌ることが出來るだらう

三、實證的方法。これは矢張り推理と論理とを用ゐるけれども、然し事實を分類し、事實から一般的結論を歸納し事實を連絡させ、その中から法則を發見するための、補助的武器として用ゐる、從つて何よりも先づ存在してゐる事物の觀察研究に立脚する。この方法こそ吾々社會主義者の應用するものである。

前回に於て、予はプラトンの理想主義を述べたが、今方法と思想に照して、よりよく理解出來たであらう。

プラトンの絶對的理想主義は、今日でも時々甦つて來るが、——例へばジョーレスの思想の如く——それは今述べた考へ方の中で二番目のにあたる。即はち何等實驗も研究もせずに只推理に依る許りであつた。然しこれとても、想像の上に立脚した盲目的信仰から見れば、餘程の進歩である。

さて第十八世紀は、合理的方法の勝利の時代である。「一切を支配すべきものは理性である。」と十八世紀の哲學者達

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は言つた。彼等は近代哲學の創始者デカルトの批判的懷疑的方法に從つて、一切を理性に置かんと欲した。

十八世紀は歴史と最も注意すべき時代の一であつて、この時代を知らずしては、十九世紀を理解することが出來ない。この世紀は獨斷に對して宣戰した。而して宗教が、一切の獨斷、信仰、無根據な斷定、迷信の落合ふ所であつた―が故に、十八世紀の思想家、即はち、ヴオルテール、ディドロ、ダランベール、コンディヤック、エルヴエティユスの如きは擧げて宗教的迷信、否宗教其物に宣戰した。

この批判的合理的方法に立脚して、十八世紀の古典的共産主義者モレリーは、その共産的理想を發展せしめた。モレリーは、單に共産主義思想の先驅者である許りでなく、シヤルル・フーリエとバブーフに感化を與へたといふ點で以て、吾々に興味がある。

モレソーを研究してゐると、何時の時代にもある、陳腐な定り切つた共産主義反對論に對する駁論を見出すので、甚だ面白い。人は言ふ。「君は人間性を變へようと次する。人間性は惡である。」かう言ふ風に斷定する者は誰でも、自分の事を考へてゐるのでなく、隣人のことを考へてゐるのだ。そして皆が同じことを言ふ。「共産主義實現の可能性はないよ。何故なら、人間性を變へることは出來ないから。悲慘は常に存在した。何故なら、惡が常に存在したから。悲慘は現在も存在してゐるし、常に存在するだらう。」

モレリーは此の議論を打破する所から初める。

然し先づ予はモレリー自身に就いて一言する。彼の傳記に就いては少ししか知られてゐない。知れてゐる總ては、多分ヴイトリ・ル・フランソワで一七〇九年に生れたであらうといふことである。然し彼の著作の題は分つてゐる。即はち「一七四三年巴里版、人間精神論」「人間心情論（一七四五年）」「美の物理學、或は美の魅力の自然的威力・アムステルダム版、一七四八年）」外にさして重要ならぬ二個の著作がある。然し、吾々に興味のあるのは、次の二大作である。「漂泊島の難破或はラバズイリヤード」（漂泊島とは、特權階級をさす。）「自然法典或は眞精神とその法則（一七五五）」編輯者の名は書いてない。何故なら、該書は甚だ危險だから。

自然法典（ルコードドラナチユル）。吾々はその主要題目に就いて研究しよう。その中で吾々はブウルジョア新聞記者、官學者連等が、人間性に就いて繰返す古い知識や議論にお目にかかる。

モレリーは言ふ。「彼等の言ふことを聞き給へ。彼等は抗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

議すべからざる原理として、及びその一切の組織の根底として、次の重大な命題を提示するだらう。『人間は生れながら不德義であり不良である。』また或者は言ふ。否、人間が人生に於いて位する狀態が、その存在の構成が、不可避的に人間を邪惡にする。」モレリーは人間性のこの全然邪惡な形而上學的概念に反對して、人間性を決定するのは人間ではなく、生活の制度狀態であり、その中で人間が進化して行く環境であると言ふ、近代の基本的思想を打立てる。彼は問題を提出する。「人間が墮落したり邪惡になつたりすることの不可能な、若しくは出來るだけ不良でなくなる樣な狀態を發見しよう。」

「一切の不德、奸曲、邪惡の眞の源泉は何であるか。」とモレリは疑問を發する。かくして彼はこの源泉を自負心、所有慾の中に求めた。そして言ふ。――「天賦の惡がない如く天賦の觀念もない。」

これは何を意味するか。形而上學者は、人間は、生れる前から、或は生れると同時に頭腦に植ゑ付けられた觀念を持て生れると信じた。近代の哲學はこれを否定する。天賦の觀念といふものはない。

人間性といふものは、白紙であつて、その上に生活共物が何でも書きたいものを書くのである。

『反對に』とモレリは揚言する。「現實と一致して、自然が吾々を社會生活、社會的共生（ソリダリテ）へ向はしめる性質を與へたが故に、吾々は道德的傾向、社會的傾向を有する。吾々は孤立しては何も出來ない。吾々は勞働に依つてのみ滿足すると言ふ欲求を持つてゐる。」モレリはまだ現代の勞働、集團的勞働を知らなかつたし、又、機械も、大工場も知らなかつた。只推理に從ひ、合理的方法に從つて、彼は、人間性の欲求は集團的生活に依つて、社會的生活の中でのみ、滿足されるといふ結論に達した。

彼の財產に對する批評は全く正當である。彼は所有慾の中に、「持つ慾望の中に」吾々の他の一切の惡心の源泉を認めた。彼は、後になつてシャルル・フーリエが認めた所から餘り遠ざかつてゐない。フーリエは、利己心は其自身決して惡心ではないと考へた。他人の欲求を奪はないといふ條件で、自分自身欲求に從ふには、人は利己心を必要とする。

モレリーは、吾々の多數の反對者が、人間性を持ち出して繰返す議論に反駁する。彼等は言ふ。「子供を見給へ、子供は言はゞ自然の手から出た許りだ。それだのに、常に爭

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ、相互に喧嘩するではないか。」勿論、是等の敵對心は、やがて消滅し、また眞の人間を判斷するには子供を以てしてはいけない、と答へるのは易しい事だ。

　モレリーにとつては、丁度空想期の社會主義者のやうに共產主者を創始するのは、新道德を創造することを意味した。空想主義者や初期の共產主義者も勿論その思想の確固たる基礎を求めた。この基礎は何處にあるか。無產階級は存在してゐなかつた。資本家社會は漸く生れた許りであつた。大工業は存在してゐなかつた。共產主義の基礎となるべき、社會革命の機關となるべき革命的階級は問題となり得なかつた。では何處にこの基礎を求むべきか。初期の共產主義者はそれを新道德、自然の新概念の中に求めた。彼等は言ふ。「諸君が諸君の周圍に見られる社會は自然的ではない。それは人工的社會だ。」十八世紀の標語は「自然に歸れ。」であつた。人々は封建社會は終に近づきつ、あると言ふ豫感を持つてゐた。そして是等の空想家は言ふ。「沒落すべきこの制度は、それは自然的制度ではなく、人工的制度だ。」新社會を建設するには、眞の自然に歸らねばならない吾々はこの思想をジャン・ジャック・ルーソオで詳細に研究しよう。

　吾々現代の社會主義者はかう言ふ事は言はぬ。吾々は社會は、たとへ古代の社會でも、人工的だとは言はない。一切の社會、一切の歷史上の時代、一切の社會形式は自然的である。即はち夫々の存在理由を有してゐる。生產、自然力に關する知識、生活、條件の貧困、特に生產手段が存在する狀態がある限り、社會は、その樣々な階段に於て、事實に於てあつたものより他のものではあり得ない。奴隷制も農奴制も、資本家社會と同樣に自然的である。一切の社會は歷史から起る。歷史は發展であり、不斷の變化であるそれは週期的に繰返し、容易に豫見出來る、自然法則、例へば四季の變化の如きものではない。それは化學的、物理的又は機械的法則ではない。歷史は、變革、發展、進化の社會的法則である。

　機械もなく、自然法則に關する知識もまだ少く、生存競爭も、最も野蠻な條件中に行はれてゐた時代には、奴隷制も必要であつた。奴隷制は廢滅し、農奴制に代られた。生產力の發展、及び自然法則の知識の發達と共に、吾々は農奴制から資本制に移つた。

　所でモレリーの書は——特にその共產主義は——勿論一般の好む所ではなかつた。當時甚だ有名だつた哲學者、百

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

科全書派の人達、例へばレイナルの如きは言つた。「モレリーの思想は、漠然たる放言であり、大きな詭辯である。」當時の名士の一人、文學史家ラ・アルプは、モレリーの書に就いて言つた。「總てが、一樣に沒常識で無恥である。財産と勞働との共有――病的頭腦の狂じみた假定。」然し革命の大苦腦の間に、最初の革命的共産主義者バブーフは――彼は、獨裁に依つて、政治的權力の奪取に依つて、財産の情態を變革しようと努めた――「自然法典」の事を語つて、それは最も決定的であり、最も完全であり、更に言はば、最も激烈な組織の競技者である。」と言つた。

事實、モレリーはその共産的體系を三個の基本法則に基礎づけた。

第一法則。何物も私有財産として存在してはならない。

第二法則。一切の人は公共的役人として見られなければならぬ。換言すれば、社會の各員は、社會に必要な公共的奉仕、有用な仕事を果さねばならない。

勿論、吾々の時代では、根底に於いては甚だ正當なこの思想を、同樣の方法では說明しない。吾々は役人制度が何であるかを餘りに知り過ぎて居り、官僚制度に對して憎惡を懷いてゐる。吾々は、共産社會は一般化された官僚制度だとは決して言はない。然し各人が自身にとつても他人とつても共に有用な勞働を果さねばならない事は眞理である畢竟若し諸君が、時に軍隊の兵士であり、時に工場の兵士即はち賃銀を貰ふ傭人である、總ての勞働者をとつて見る時、彼等は役人ではないか、彼等は一の機能を果してはゐないか。彼等は、自身達にとつても亦全社會にとつても有用な社會的機能を全うする代り、資本家的機能を全うしてゐるのである。

結局、吾々の科學的方法は、全然新奇な制度を規定するために、一制度に屬してゐる言葉を使用するのを禁ずるのである。「役人」と言ふ言葉は、資本家的國家に屬する。吾々はそれを資本主義にやつてしまはう。吾々が共産社會に於ける人々の役を語る時には、新社會のために、新しい言葉を用ゐよう。例へば、國家といふ言葉を使ふ代りに、「ソヴィエット」といふ言葉を發見した樣に。何故なら、「ソヴイエット」は新時代、新制度を表現するものだから。

第三法則。全員は勞働しなければならない。勞働の普遍的負擔は、ソヴィエット制度の法則であり、一切の共産制の法則である。然しモレリーは決して單一主義者ではなかつた。彼は各人が同一の勞働をすべきものとだは考へなか

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた。彼は勞働者を種々の種類に區別した。各人はその能力、才能、智力、年齢に從つて働くことを彼は要求した。

モレリーは同じく貨幣を廢し、資本家的交換を廢する。彼は多くの大商店の施設を要求し、そこに集合的産物が集められ、そこで各生産者は社會がその勞働に對して負うてゐるものを受取る。彼はまた機械的平等にも信を置かなかつた。彼は賞歎すべき言葉を發見した。――「調和的不平等」即はち特權の上でなく、努力の調和の上に基づいた不平等を意味する。

アインスタインよりバルビユスへ。

この手紙は八月十五日號の「クラルテ」誌に載つてゐたもので、アインスタインからバルビユスに宛てたものである。短いものではあるが、『現代が持つ最大天才』の一片影を窺ふに足るものと思ふから、玆に紹介しておく。

敬愛するバルビユス氏へ。

巴里滯在に就いて、『クラルテ』の讀者へ何か話して呉れといふお頼みでございますね。

巴里滯在によつて、私は極めて美しい感銘を得ました。私はこの美しい想ひ出を、悦びと感謝とを以て、胸に刻みつけております。佛蘭西專門學校の學友諸氏は、舊友のような溫かさを以て私を迎へて呉れました。そして私は、現在に於ける各國の政治狀態からして、當然感じさせらるべき筈の隔意を、微塵も感じないで濟みました。共通の仕事、共通の利益は、即座に過去の陰影を飛散させて了つたのです。靜かに席を交へて、私達は何回となく、政治問題を語りました。私は、私を取り卷く諸氏の眼の中から、憎惡の色、戰勝の熱情を、見まいとしても見ないではゐられないやうな氣がしました……が事實諸氏の眼の中には、寧ろ淋しさと不安がありました。

戰爭の原因に關しては、獨逸に於ても佛蘭西に於ても、人民各自が解決すべき義務あるものとして考ふべき、一の國民的問題があると思ひます。

私は、今更、忌はしい過去の中へ逃避しやうとすることや又、この兩國の精神狀態を健康なものにしやうとする色々な議論に對して、何等の期待も持てないのです。もつと〳〵重大なことは、この荒らされた土地改造事業のために、佛獨兩國が協同して從事することだと思ひます。協同事業は豐かに行なはれます。それは信頼を產みます。そして信頼は人と人との親しみと接觸によつて助長されます。この見地からして、佛蘭西專門學校の學者團が私を招かれたことは、勇敢な第一歩を踏み出したものと云へます。この努力の後へ、他の幾多の相互間の努力が隨ふことを、私は希望しております。

私は、個人的にあなたとお知己になる機會がなかつたのを、非常に殘念に思ひます。あなたの寫眞は、私の亡母の寫眞と列べて私の仕事机の前に懸けられてあります。心からあなたに敬意を表します。

一九二二年七月十一日　ベルリンにて

あなたの　ア・アインスタイン

◇前田河廣一郎氏著（創作集）

三等船客

藝術的裝禎
四六版三五〇頁
定價二圓二十錢
送料金十錢

最近文壇の一大驚異は
巨人―前田河廣一郎氏の出現事である。
彼の藝術は、鐵と鐵との烈しい音響
汗と血との强い色彩、さらに渦卷く
熱火の如き大情慾の苦惱、奔騰！
見よ！かゝる大陸的藝術を!!

内容
◇三等船客
◇熊さんの死
◇路傍の人々
◇地獄
◇マドロスの群

東京神田表神保町十番地
自然社
振替東京三五五一〇番

金子洋文氏著（人と思想叢書第一卷）

生ける武者小路實篤

四六版 百三十頁 定 上 九十錢

愈發賣さる

凡る意味に於て武者小路實篤は世界の人である、彼を解剖し批判し検討することは、同時に日本及世界の思想藝術を鮮明することに外ならない、武者を論ずるに洋文ほどふさはしい者はゐない、彼は武者を尊敬し愛してゐる、而も彼は武者の追後者でない、彼は思想的に武者と對立する。新らしく擡頭しつゝある時代の革命精神に燃え立つ精鋭の彼が、如何に武者を論じ武者を生かし、武者の思想を剔抉してゐるか、革命非か是か、暴力の肯否如何！蓋しこの書は現今世界の視聽をあつめてゐるロラン對バルビユスの論戰をそのまゝ觀る感がある。

東京府下代々木大山千四十四番地　種蒔き社出版部　振替東京五九三八七

前月號目次

革命運動と反革命運動（題言）……
無產階級と美的要求…… 社論
プロレタリアの進行曲……
プロレツトカルト、インタアナショナルの意義……
ロシヤの社會教育……レーニン夫人
獨逸に於けるプロレツトカルト運動…
勞働階級教育の革命意義…靑野季吉
死體の發掘……麻生久
エス、エル黨員の罪狀……
無產階級運動の方向轉換（小牧）―小川未明の「生活の火」光造）―ヨネ、ノグチの天井（弘二）―「少年敎化と言ふこと」（孝丸）―詩人の合葬（淳三 ―第一作家同盟に就て（弘二）……
□地方欄―聳人―赤籌……
□エスペラント講座……

編輯後記

九月號は、光榮にも第三回目の抹殺をうけたわけだ。僕たちは、最初の時のやうに昂奮しなくなつた。靜な心持だ。しかし、波立たないけれど、澄んでゆくだけだ。今は底力を養ふべき時だ。永遠の勝利にむかつて進む時だ、種蒔く人も一週年を迎へた。讀者よ、仲間たちよ、最初の一週年を首尾よく迎へたわけだ。遠く秋田に遠征した。小牧、洋文、賢三皆歸つた。そして次の豫定であるところの、準備にむかつて進まうとしてゐる。いや、進みつゝある。讀者よ！此の一週年記念號を見てくれ、外觀よりも内容に、ひそめる熱と力を備へた此の創作號を見てくれ。今まで傑作は質よりも量であつた。果して、眞に生ける藝術は、質より量であらうか。眞に生ける藝術は量より質だ此の意味に於て、種蒔く人は、一週年で新しい試みをしたのだ。批評家よ、沈默せよ。砂粒のなかの寶玉は君たちにわかるまい。片々たりと見える此の雜誌のうちに、如何なる力が秘んでゐるか君たちにわかるまい。僕たちの仲間は別に在る。新しく燃えて來る大衆の力そのものだ。此の一週年で、たゞ無言のうちに、猶固く〱、讀者と手を握らう。

定價　一部三拾錢◇半年前金一圓八拾錢◇一年前金三圓六拾錢御註文はすべて前金のこと◇代金の領收は雜誌發送を以てする◇送料內國壹錢外國四錢

廣告　廣告及廣告料については直接本社へ問合せを乞ふ

宛先　寄贈、通信購讀申込及び送金、其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て「種蒔き社」宛

締切　每月五日

大正十一年九月廿八日　印刷納本
大正十一年十月一日　發行

東京府下代々木大山千四十四番地
發行人編輯人　今野賢三
印刷人
東京市神田區今川小路一丁目一番地
印刷所　同工社
東京府下代々木大山千四十四番地
發行所　種蒔き社
振替口座東京五九三八七

大賣捌　東京堂　上田屋　北隆館　至誠堂　東海堂

蒔種く人　第二年第三卷第十三號（大正十年十二月一日第三種郵便物認可）大正十一年九月二十八日印刷納本　大正十一年十月一日發行

本號特價三十錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蒔種く人 第二年第三巻第十三號（大正十年十二月一日 第三種郵便物認可）

大正十一年九月二十八日印刷納本
大正十一年十月一日發行

本號特價三十錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大正十年十二月一日（第三種郵便物認可）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA